

の五ヶ年計畫いな支那の三ヶ年計畫の出来上つた一九三六年こそ眞の日本の非常時がやつて来るのだ。今から我等は一層心をひきしめて此の眞の非常時を目度く突破して平素の我等の信念を十二分に發起しておそれ多くも日夜心を御なやま

し遊ばされる、天皇陛下の大御心を十二分に御慰め申し上げなければならぬ。我等は此の心をもつて非常時二年生の意氣を心深く辨へて眞の非常時を突破しなければならぬ。

### 彦中應援歌

(一) あゝ英傑が夢のあと

歴史は遠く三百年

金龜城頭我立ちて

尙武の風に嗚けば。

(三) あはれ雲待つ蛟龍の

猛者一たび地を揺れば

強風陣々雲捲いて

行く手に敵の影も無し。

(二) 花たちばなの香に匂ふ

健兒の意氣は天を衝く

氷刀腰に夜泣いて

たぎる正義の血潮あり。

(四) 旌旗は高く天を摩し

金鼓勝利を告ぐる時

月の桂の香にむせぶ

今宵健兒の夢如何に。



### 論説

## 歐米視察漫談

(速記)

彦根高等商業學校長 矢野貫城氏講演

昨年十月此の地を去りまして丁度滿八ヶ月で歸つたので文字通りの駈足旅行で、視察と言つても、殆んど何にもわからないで歸つて来たのであります。本来の目的は商業教育と教育全般に亘つて見たり聞いたりした事であるが、兎に角短日の間で何も不充分であります。其の中の幾分かでも話す事は國家に對する使命でもあり、又義務でもあると考へて壇に上つたわけです。併し順序をたてるひまがなかつたのでおもしろい話でもありませんから、あしからずおゆるしねがひたい。私が感じたことで最も強かつた事を先づ申し上げますと、私が新聞記者に對しても話したのですが、歐米の國と國との間の競争の激しいのに對して驚いた事です。ヨーロッパ戦争のおこつてから二十年近くもなつて居りますが、その當時、殊に米國の如きは今度の戦争は世界戦争をなくするための戦争をするのだと云つて居た。然るに今月ではあの痛手にもかへりみず再び戦争をするのではないかと思はれます。

パリに居つた時にその近くのベルダンへ行きました。

途中上海事變の戦跡を見ないのでありますが、ベルダンは上海ほど生々しくはありませんが、その破壊は甚だしくその戦の間は短かいのですが、砲彈の落ちて居ない所はない程です。或る村の如きは全部なくなつて居ります。その當時塹壕に居つた兵隊の上に爆彈が落ちて来て兵士はうつまつてしまつて、今では死骸をほり出さずに銃剣だけが置いてあるのを見て感傷無量で

あります、到る所一面墓碑があり且ついたる處の學校——日本の専門學校程度ですが——その學校には必ず戦死者の名をほりこんだものがあつて、必ず在學生や卒業生の名前がほりこんである。先達つてカナダのバンク村の山の中であつたことがありますが、その村は甚だ小さな村でありますが戦死者が五十二人出ました。然るにこのやうな痛手にも拘はらず又歐洲は第二の戦争を勃發するのではないかと思はせられ、いたく悲しむしだいであります。私がニューヨークに居る時に、平和運動に關係した人の講演に歐洲各國間の關係は一九一四年よりも、もつとひどく、——これは世界大戦の始まつた年ですが——なつて居るといつております。此れによつても、ヨーロッパの國と國との關係が激しいことが如何なるかをお分になりませう。

例へば佛國と伊國の如きは非常に仲が悪い。それで軍事探偵を出して居るのであります。又ユーゴスラビヤと伊國との仲もかくの如きで、伊國での砲臺を調べて佛國の新聞に出して「こんなことをして居る」と廣告したとの事です。又ユーゴスラビヤの青年は伊太利のムツソリニーの悪口を歌に歌つてゐる、ポーランドと獨逸との關係は——これは地理でも御承知でせうが獨逸はポーランドの國內に東プロシヤ領があつて、獨逸人はポーランドを通らねば東プロシヤに行けない。故に獨逸に自國領であつたポーランドを絶対に恢復せねばならぬと言つてをりポーランドは又これを防ぐ爲盡力してゐるのであります。而して現在ポーランドは軍事費を莫大にして、殊に日本に親しみを持つてゐる。私がオーストラリヤからチエツコスロバキヤには入る時偶然ポーランド人に車中に會ひ、その人が紹介せねばならぬ人があると言つて、その男はポーランドの日本に居つた公使で、アメリカへ行く途中是非寄つて呉れとの事でした、非常に日本に親しみを持つてどうしてもポーランドと日本とは仲良くして行かねばならぬと言つてゐました。獨逸の仲悪いのは勿論であり又スイスの平和國でさへ學校教練をやり盛に軍備をと、のへてゐる。デンマークは平和國であつたがそれも今は獨逸に對して非常に悪感を持つて居る。兎に角歐洲各國間は仲が悪く人種と人種との競争が激しいのであります。新聞で讀まれたでせうが獨逸人はユダヤの醫者にか、つてはならぬとか、ユダヤの譯護士を頼んではならぬ等言ひ、又、ユダヤ人の店で物を買へはお前の寫眞を撮ると、店頭に書いてあるし、又百貨店の入口にナチスの制服男が立つてゐる、デロ／＼見てゐるので客人が減つて行く。かういふ風に各國間の關係、人種と人種との關係は吾等の理想から非常に遠いのである。これを如何に處理するかは重大問題である、吾々の理想としては日本がどんなしめいを果さねばならぬ事實実際しつておかねばならぬ、經濟關係に於ても國に入る時に懷中を調べ、そして出る時には其より多くの金を持つて出る事が出来ない。例へば五千圓持つて入り五千五百圓持つて出る事は出来ない、オーストラリヤ、ハン

ガリーでも制限を加へてゐる、私がロンドンに行く時に二百圓多く持つて出ようとしたが、許されないで、ロンドンまでの切符を買いそれでも餘つたので、ちよつとした間でも自動車に乗つて其金を使つてしまつた。(笑聲あり)よく外人が私に滿州問題について議論を持ちかけたが私は其人々にかくの如く言ひました、人間と人間との戦争を止めて、人間と自然との戦争をやらうではないか、しからずんば世界の平和は實現されないのである。

現在の世界の人口が八十億人あつても其れを養ひ得る土地はある、それに十六億の人間を養ひ得ないと云ふのは人類の恥辱であるそれよりハワイに自然研究所を作つて、自然征服の研究をやつた、ならば人類はより平和になるであらう。今日の様に國と國との競争がはげしくは決して平和はこなひのである、次に國家主義ではあるが自分の國本位で立つて行き他の國に依頼する國家は不安である、この問題は滿州問題と關係がある、チエリツヒの或人が自分に親切にしてくれた、其人が私に日本が支那をあの様にいじめるのは、いけないではありませんか、と云つたそこでもう二、三十年もすれば日本の國の立場がわかるでせう。歐洲人が滿洲を知らないで滿洲問題に關して議論を吹きかけられます。

親しいニューヨークのヘルモン教授に會つた時は私の方から滿洲問題を持ち出して先生の經濟學者としての意見を聞いたが先生は「日本はあれ程まで滿洲に於て行動しなくてもよいぢやないか」と言はれた、私はそれに對して喧嘩だから日本も支那も悪いのだが併し滿洲で戦争を始めたのは兵隊だ、而し武器を持つて居る兵隊があまりに輕蔑されたならばよいか悪いかは別として戦争をするのは當然である。」と言つて置きました。私はデンマークの農村組織を見て來た或國民高等學校の校長の言に「この學校の生徒は近頃半減したそれは農村の疲弊によるのである、農村は貧乏に苦しんでゐるがこれを見ると外國に關税を上下されるのでは領土の少ない國では不安でならぬ、日本は然りであるがどうしたらよいか」と尋ねたら答へなかつた。」とにかく商品も賣る事が出来ないし領土も出來ず何時何時税等をかけられて賣れなくなるかわからない。それで日本等も移民もする事が出來ず如何にすればよいか。滿洲問題に於て日本は人々の増加著しく滿洲がほしいだらうといふ。それで私はその人に言つた。「而れども日本は正義の觀念なくしては戦争出來ない國民である。正義を感じてはじめて一生懸命に働く事の出來る國民である利害關係にのみこだはつてゐるないで正義に依つてあの如き勇敢な行爲が出來たのである。アメリカで滿洲問題の悪口を言はれるのに日本人として残念に思はれたが日本で生れた、或アメリカの女が「自分はどうも日本が滿洲の事に付いて悪く言はれるのが残念である」と言つた。日本は何故支那と戦争するのかと言はれた時に私は言つた。「徳川時代の戦を見て吳

れ戦の場合にも歌を詠み又敵國の人民が困つてゐる時に鹽を送つたではないか日本は昔から他國に對して餘り残酷な戰爭はして居らない。

日本を今日あらしめたのは歐洲各國からその流儀を傳へたのではないか、若し日本が無かつたら支那はとうに歐米各國のために取られてゐるだらう。兎に角愛國心が日本の專賣特許品であると言ふが、これは世界各國の誤解である。例へば日本の思想問題に於て「ロシアが日本よりもよい、吾等の祖國ロシアを守れ」と豪語する共產黨が居る。フランスに於て社會主義かあるかと問へばあるのはあるがロシアのそれとは違ふと言ふ。ロシアを祖國と呼んでゐる様な者はないと思つた。

世界各國人は兄弟であり姉妹である人種が異つてゐるからとて争ひをするのは野蠻時代である、吾等は實際状態を見る事を忘れてはならぬ。人類に貢獻するには先づ自國を立派にしようといふ事を主眼にしなければならぬ、斯くすれば各國もこれに習ふものである、自國をぬきにして、人類に貢獻せんとするは不可能である、諸君にこの点をよく理解して居て貰ひ度い。世界は非常に狭くなつてゐる、私がデンフランシスコを出るとすぐ無線電信を東京に打つ事が出来た、自分が世界一周して見ると各國の間が非常に接近してゐる事を實感する。自國をよくせねば、人類に貢獻する事は出来ないといふ事をよく知つて貰ひたい。世界は近く小さくなつてゐる各國と各國との間が非常に密接になつてゐるといふ事を充分よく知つていただきたい。パンクローバの日本好きの校長に世界の狭いことを話したついでに、私の感じた事は日本人は非常に優秀な國民であると言ふことである。この点を諸君に話の出来る事は喜ばしい事である。外國では日本人が顔色が黒い部類に這入つてゐるが、米國では白い部類に這入つてゐるらしい。米國の電車や便所も白んぼと黒んぼとに別れてゐる。私が黒んぼの電車に乗つて居た時に黒んぼ達に笑はれたので白んぼの中へ乗つたら笑ふのをやめた。有色人種排斥となると日本人もその仲間入りである。日本人は背が低く体がでつぷりしてゐない。吾々が洋服を着てゐるのは丁度西洋人が日本の着物を着てゐるのと同様に見にくいものである。日本人は西洋人に少しも劣つてゐない。例へばカルフォルニア州の學校等では日本人の成績がよい。併し日本人が各地で成績のよいのは事實だ。又日本の商品は各地に行き渡つて居る。商賣も日本人はうまい。日本品が世界各地に殆んど行き渡つて居ない所はない。セルロイド、陶器等が最も盛んでチェックスロバキヤ等では *Činěná Japan* の名ではやつて居る。又音樂に於ても優れてあちらで若い時からやつて居る、ビヤニストの井上がある會で一番をとつた。運動の方でも身体は小さいが馬鹿には

ならぬ。日本品は粗製濫造の聲が消えて、安くてよろしいと云はる。商業道德に於ても英國を除いては日本が一だといふ。前には日本の秀れた物は兵隊と醫者だけだと云はれて居たが、近年は全部が秀れて來た。かういふ秀れた國民であるといふことを聞いて愉快に思ふと共に吾々は深く考へなければならぬと思ふ。日本人が頭に於ては決しておとらないが、獨逸人は自分の任務には馬車馬のやうに働く、日本人は先を見通して、馬鹿らしいと思つてやらない。獨逸人はこつ／＼やつて居る。その中に發明もする。この点はもう少し學ばねばならぬ。日本人の頭のよいことが却つて缺點になるのかもしれない。とにかく日本人は頭が良いのであるから自重し自負しなければならぬ。吾等は大國民にならねばならぬ、運命を持つて居る。深みあり落着きある國民になるやう心掛けねばならぬ、この点ドイツ人に學ぶべき所が大なのである。日本人は又非常に認識されて居ないことを残念に思ふのである、日本の國を知つてくれるのは獨逸人だけで他の國の者は大抵知らない。

日本には富士があるとか鳥居があるとか櫻があるとかその上部ばかり知つてゐる、併し日本人の文學や青年の考へ方がどんなであるか知らない。日本と支那との趣味をこつちやにしてゐるのは、ハンブルグのハーゲンベック動物園で日本島があつてその入口の鳥居に日本島と書いてある、そこにか、つてゐる橋は何と見ても支那趣味の橋で日本を理解したつもりでも日本と支那とごつちやにしてゐる。又リパブルに着いた時日本の家にチャイニーズハウスと書いてある、又佛壇は日本製のもので、それは彦根から來たのかも知れないのにベキンから來たものだと言つてゐる。

又「お前の國にも獨立運動が起つたから早く歸れ」と言ふ者があつた。「日本に紙幣があるか」と質問してゐる認識不足な人間もゐる。併し、西洋人に日本字を教へる事は不可能で、西洋人としてもとても覺える事が出来ないのである。従て日本は外國語を使つて日本國の藝術やその他の事柄を知らしめる機努めねばならぬ。私がチェックスロバキヤで歐洲人の日本の認識不足を言つた所或地理の教師が私が日本の事で地理を十頁ばかり書いてゐるが、心配だから異つてゐないか見てくれと言つたが時間が無かつた爲見てこなかつた。とにかく日本が知られて居ないのは残念である、いたる所で日本がまちがつてゐる、今まで日本がちよんまけにゆつてゐる様に考へてゐる。日本を見又日本に來た人は日本をほめる、日本人はもう少し世界に知らねばならぬ。私がデンマークに居た時ざつし公理遂勝強利と書いてあつた。かうゆう風に支那人は常に西洋人に知らしてゐる、日本人がせつばつまつて外國人が認識不足等ゆうのは日本人の手後れであると思ふ、もう少し日本は平常から外國に日本を紹介しておく必要があるのである。最後に申あけたい事は私がカナダの鐵道に乗つて居た時三日間一緒に乗つて居た男が

あつたが。一見支那風の人でたしかに之は支那人だらうと思つて初は何も言はなかつた。所が雨が降つて来た時其男が雨が降り出したと言つた。其から話を初めて「何處へ行くか」と聞いたら「歐洲の文明を見て来たから支那へ行く、上海へ行くのだ。」「それでは上海に〇〇言ふ人が居るが知つてゐるか」「知つてゐる」「其ではよろしく言つてくれ」「君日本に來た事があるか」「日本にちよつと來た事がある日本の瀬戸内海は美しい。京都と奈良を知つてゐる」「而しお前の見た日本は支那と、ごつちやにしたものだ。もう少しく見なければならぬ。」「日本は餘り西洋かぶれをしてゐる、私は支那と日本が戰爭を止めるために上海に行くのだ。自分が日本へ行く時は松岡氏に合ひたい。ミスタ松岡に合つて支那と日本が仲よくする様にした」「そんな事をして暗殺されたらどうするか」「そんな事は無い」所が其男の言ふ事が面白いので「歐洲文明はもう之でおしまいだ、之から東洋の文明が必要だ。今や日本は歐洲のうそつき外交をまねて來た、例へば平和運動や軍縮に於てもさうで軍縮／＼と言つてゐても少しも實行してゐない、歐洲のうそつき外交をまねてゐる。日本が支那の皇室を戴て滿洲の皇帝にしなくても日本の天皇を滿洲の皇帝にすればよい。西洋の文明はけんくわの文明だ。東洋の文明を世界に擴めよ擴げるのは日本だ。日本は支那のリーダーとなつて東洋の文明、文化を世界に擴けてもらいたい。日本の皇帝を滿洲の皇帝にしても差支へない。

日本人にやましい心がないならば滿洲を正々堂々と治めて行つてよい。又支那人に善政を布く様にしてやれ、吾等は西洋の文明の長をとつて發展して來たのだ。西洋の文明をよく理解して西洋の文明の中心をつかむ様に努力したい。とにかくもう少し東洋の長を保存し東洋の文化をよく消化し日本の歴史を消化し東洋文化を代表して之を西洋に擴める運命がある。

之こそ吾々國家存在の意義があると思ふ。之は誰がやるのか、すぐ將來の日本を背負つて立つ諸君の肩にか、つてゐる。イタリーのムツソリー首相がもうイタリーの古い人間はだめだ。

青年を純に保つておこななくてはならない。青年の訓練が必要だ。日本の將來の運命についても背負つて立つべき諸君のお考へ如何によると言ふ事をお考へになつて、充分この高尚な日本國だと云ふ事を自負して下さい。色々お話ししたい事があるのですが時間が足りないものですからこの位にしておかうと思ひます。(文責記者)



## 生活を闘ひとるの道

— 主體 整備 備論 —

( 特 ) 尾 田 鶴 治 郎

生活はどこにある。

こゝにいふ生活は生存のそれと區別して考へられる。たゞ單に生きてゐるといふ事實の存在が生存であり、眞に人間としての生活の意義を自覺し、現實にそのよるこびを享取してゐる状態を生活といふ。オスカア、ワイルドといふ文學者は「大抵の人は生存してゐる。が、生活してゐるものは稀だ。」といふ意味のことを言つてゐる。たゞ生きてゐるだけでは人間としての生存者ではあるが、必ずしも人間の生活を得てゐるものとは言へない。生活は生存とは別にある。別にして考へねばならぬ人間と人間以外の動物との差は創造的衝動の有無にあるともいはれてゐる。動物的な單に食色の本能隨順のそれ、或は無爲徒食の寢て食つて起きての徒のそのまゝが日々の事實であるならば、そこには生物學的の生存乃至生活はあつても人間としての生活はない。人間としての生活は、やはり人間としての生命のはたらきの上にある。人はその生命活動の中に自己を實現し自己を創造する。その生命のはたらきの意義が人生の意義である。人は人生の作家として、社會にその作品を送る。その仕事の上に生活がある。そしてその作品の自らなる大小良否がやがてその人格の大小高下となる。はたらき、この人間的建設を外にして生活の意義はない。

はたらきは自我がその對象とピッタリと一緒になるところに生じる。主體が自我であり、客體が對象であり、この二者の具體的結合を得て生命が発生し、こゝに力が生れる。自我そのものだけならばそれは働きの因子ではあつても働は到底成立せないのである。逆に對象それのみの存在でそこに自我の息吹をうけない限り、働とはならない。ピアノはあつても自我に之を弾じうるの素養がなければ二者の結合はない。音樂の働は生れぬ。又素養はあつても、そこにピアノが興へられぬ限り、如何な

る天才も之を發揮する機會を有しえない。主體が整備し之が發動してよくその客體と結合し融合するところに、すべてはたつきが生れる。二者のうちその一を缺く場合は生命のはたつきは發生し得ぬ。即ち生活とはならぬ。

「こゝろよく吾に働く仕事あれ、それをしとけて死ななと思ふ。」これは啄木の歌である。意は自我が好個の生命對境を獲得し得ぬ苦衷の訴へである。人生の幸福は仕事の上にある。特にこゝろよく働かうる仕事を獲得して、そこに自我と對象とが全我全熱を以て完全に結合せる状態が生命の歡喜であり幸福である。地位名分の如何を問はず、自己の當面の仕事（對象）に向つて感激し没頭し専心し熱中してゐる、生活態は何れともあれ最大の幸福者の圖と見て、完全なる主體整備と、之が客體への完全なる結合を得てはじめて達しうる生活の三昧境である。

生活を闘ひるといふのは、かうしたよりよき生活境地への要求を實現せしめる情熱であり努力であり、過程である。

よりよき生活とは、過剰のそれ、生活の現實態に何もかを加へる、理想觀から出發した可能的の完全生活である。發展の積極的な創造的なより以上に眞實なる生活への生活意志である。讀書も研究も創作も實驗も教育も經營も公務もすべて人間の生活ではあるが、そのはたつきは實質内容に於ては同じ讀書生活のその中に於て大なる軒輊がある。よき生活とはその中に於ての最も眞實なるべき讀書生活である。試みに吾々の教室に於ける讀書生活を反省してみよう。はたつきは主體である自我の整備は如何に熱量は如何に、その對象である文章への結合状態は如何に。たゞ文字語句をよむだけのよみもあり、内在的意味を闡明し攝取するのよみもあり、更に文を通して作者の人格に融合しその感情生活その意識世界に徹入した生活もある。小人は文字をよみ、中人は人をよみ、大人は天地をよむの語さへある。漫然たる無自覺のよみが終に眞實のよみでなく、よみの生活を十全に享受しえてゐない讀みであることも首肯できよう。同じき一本の釘を板に打ちこむ生活にしてもその工人の精神と熟練の如何によつて、格段の選庭のあるのを考へてみるがよい。同じ教師につき同じ教室同じ時間、同じ年配にして机を並べて學習するその生活の外的條件は全く同じものにして、その生活の結果に大小高下の差の格段に生じるのは何故か。子のない婦人には母といふ生活のよきこびの展開もないが、よし、子があるとしても子の上に働きかける自我（母親）の作用の十全と加力の事實とがなければ、そこには母としての生活がないと同じである。

すべてそれが生活であるためには、自我と對象との結合が要件ではあるが、その自我の實質の良好並にその對象との結合状態の具体にして且完全なるを條件として且はじめてそこによりよき生活となり、力ある生活となり、世上もろくの因縁もかくて

熟し、よろづの果報もかくして成就する。生活とはかうしたもの、この生活をどうして獲得するか問題である。

自己が出来てゐなければ生活にならない。主體が整備されてゐなければはたつきは生じない。そして一方に同時に完全な客體、適良な對象の存在を豫件とする。川柳に「孝行のしたい時分に親はなし」とある。孝行がしたいは主體であり主體の備が出来たのである、その時に生活の對象である親はゐない。すでに亡くなつたあとである。親といふ對象の存在せる時には自我が出来てゐない。やつと自我が出来、孝行の情念が燃えて来た頃は對象がなくなつたあとだ。といふ人生の生活難を生活事實の過誤から来る浩歎を、川柳子は皮肉に冷笑してゐる。意味を單に川柳にとゞめず、一般生活の上に運んで、主體整備の必要なこと急がねばならぬことを考へさせられる。

學生時代、青年期はその日々が、個人的内在的にそれ自らの生活の具現でもあらうが、未だ本格的に社會的意義を持つた生活とはいへない。むしろその日々個々の生活を一括して他日社會人として立つ、人生への主體整備の時期だといへる。現實の努力とその方向を得て優秀なる知見、強剛なる意力體力、純美なる感情が準備されるれば、當來の生活々動に於て、よく對境の不十分も超克し、對象をリードし、よく自己の坐に承當して、眞實な生活の上に形態化すべき準備期である。因果經に欲知未來果、見汝現在因とある、現在の如何がよく未來を語つてゐる重要な時代である。

われ／＼の生存の前に構たふ大いなる生命の流れ、われ／＼はこれを掴んで偉大なる生活力を發揮しうるのであるが、ただ一時の客氣から奮闘的精神だの、漲るリビドーだの、青雲の志だの、ビー・アンビシャスだなどと叫び、奮激するだけで、確乎とした主體の整備構築を缺くときは、到底十分な生活を示現することは出来ない。非常時、非常時といふもの、敢然と發動しうる自我意力情熱、毅然として守りうる捌きうる主體の實質である限り、その打開、支持、躍進にこと缺かぬ生活の勇者たりうる。むしろ彼等にとつては危難も變革も、その生活の興味となる。

はたらきの完全なる情態を客觀すると、そこには物と我と、即ち自我と對象との主客緊密なる結合が結成されてゐる。仕事の上に至熟全力が作して自我と對象との間に隙がない。物我一如の生活姿相以て我、物を生かし、物、我を生かすの至心至境である。この境に於てはじめて生活の意義も生活のよろこびも達成しえられてゐるといひうる。この間に結果する力こそ、眞の人の力である。

この境地は至誠奉公の國士としての生活の上にもいへる。生活の主體は自己である。國民としての自己の實である。之を行

ふ対象は一に君國である。自己が君國と具体的に結合する、換言すれば一身を擧げて、君國に合體するところに、國家が我であり我が國家である、國士の生活がある。生命の限りを、そのほど／＼につけて君國にブツツケてゆく、自我を無にしよく君國に渾融しつくして、はじめて國士としての自我に生きる。古來の武士道の精神がそれである。俗に鍋島論語といはれてゐる葉隠（書名）の中に「武士道は死もの狂ひなり。」の語がある。矯激な言表ではあるが、君國のため敢然と死ぬことが即ち自己を活かすの道、武士道の精髓である。自我と對象との完全なる生命結合、自己を没して自己を示現するに至る大なる尊き生活の營みである。國民としての主體の整備の出來た上は我、我を行ふの我がそのまゝ、國民としての實を行ふの歩み、即ち眞の國士としての生活となる。

學生期の現實はその國士たるべき修養、國民知の主體整備期、日夕の心身の修養鍛錬、科學常識の充實等それらが歸結合流するところが、君國のためといふ對象となる。安易徒食の徒が、無自覺狂奔の生存帯が、淺薄な感覺世界が、そのまゝ、生活でないことは冗言を要すまい。

生活はどこにある。生活を闘ひとるの道は、私心を摧折して、深き念慮の下に眞實の人間生活を建設運營する―その準備の實質の如何に存する。その發動の意力の如何、その對象の如何に存する。

神皇正統記に「凡そ王土に生れては、忠をいたし命を棄つるを以て人臣の道とす」の語がある。現下の時局に處し、眞日本人としてその生活を決定する上に特に再考したいものと思ふ。



## 兵營生活諸感

五年 大原 一夫

軍人が克く其の使命と本分とを自覺し、總て一心同體となり、魂精融合し、純情信倚してそこに渾然たる軍人精神を結晶し、戰場に於ては武勇を發揮して能く寡を以て衆を撃攘し堅壘、鐵壁をも粉碎し、平時に於ては國民精神振作の中堅を以て任じてゐる吾が皇國軍人の養成場であり、鍊磨場たる兵營といふものの實際を見、實際を経験して來た吾等は如何に誇る可きものであらうか。恐らく其れは一生活るる事の出來ない思出となるに違ひない。此の思出を今靜かにたどつて、いさゝかの諸感を述べて見たいと思ふ。尙軍隊に於ける日常生活は誰か、述べて呉れるであらうし、又前の雜誌にも記載されてゐる事故、此處では省略し、今少し内面的な軍隊といふものの眞價を述べんとするのである。軍隊の一日を見る事も亦大いに得る所があると信するが、更に其れに依て吾々が得る精神的價値は實に偉大なるものがあつた。即ち如何に軍人が軍紀を生命としてゐるか、重んじ尊んでゐるかと言ふ事に就て十分に覺る所があり、又靜かに反省するの餘地を見出すのであつた。加ふるに彼等が常に吾が日本人の本質であり日本精神の核實である「誠」を持つて行動してゐるかと言ふ

點に至つては、自ら襟を正し、嚴肅な感に打たれずには居れなかつた。畏くも聖諭には、忠節、禮儀、武勇、信義、質素の五徳、總て吾等の遵守すべきものであるが、しかも之は一の「誠」を以て貫かねばならぬとお述べになつてゐる。此の誠を以て君に仕へれば忠となり、親に仕へれば孝となり、此處に忠孝一本の國民道徳が成り立つ。此の誠を以て一身を抛ち君の恩に報ずる者は自ら神座に待して祭祀を受くるに至るのである。實に吾が國民をして神たらしむるものは「誠」である。さて前記した軍紀は軍隊の生命であり、中心となるもので、精神教育の徹底に依て振肅せられ、統制の一貫に依て保持される。而して彼等軍人の禮儀を重んずる、亦見る可きものがあらねばならぬ。兵が上官に對しての禮儀、又は相互間の禮儀等實に見れば見る程涙ぐましい許りに美しい情景であつた。洗面に行く場合、便所に行く時、風呂に入る時、何時如何なる場處に於ても、兎に角會ふ度毎に上官への敬禮は確實に行つてゐる。擧手の禮をしてゐる彼等の顔を見る時、あの引き締つた口元、輝く眼を見る時、軍人としての幽しさが一段と偲ばれてならない。敬禮の徹底、其れがやがては服従心となつて、一旦緩急の際には驚く可き戰鬥能力を發揮するのである。軍隊に必要な統御と服従心とは、外國に於ては或は法規に依て強制され、或は功利的に馴致される處が多

まで透徹してゐる。指揮者が其の職務を以て發する命令は實に大元帥陛下の御命令を奉行することを意味するもので、勅諭には「上官の命を承ること實は直に朕が命を承る義なりと心得よ」と仰せられてゐる。斯くの如くにして初めて階級統制の脈絡は上下一貫し、國體及國民の信念と渾然融合するのである。此處に本校の校風を反省して見るに、敬禮方面に於ては近時相當良化しつゝあると言へ、未だ十分ならざるの感がある様に考へる。教師に對する確實なる敬禮、上級生に對する確實なる敬禮、又上級生が下級生に對しての確實なる答禮、それがやがて吾が校の校風美化となり、眞に本縣第一中たるの貫録を示すに至るのである。併し自分も此迄上級生に對して度々缺禮した事があり今更の如く自責の念に堪えない次第であるが、要するに如何に人と人との間には、例へ其れが極く親しい者であるとしても、禮儀といふものが如何に重要なものであるか、如實に知り得られるのである。營庭を歩く兵達が上官に對した場合のあの嚴格なる敬禮を僕は今だに忘るる事が出来ない。二人以上の場合になると其の中の一名が大聲を以て「歩調とれ！」「頭右！」「直れ！」「歩調止め！」と、きびきびした號令で上官への敬禮を行つてゐる。實に愉快だ。

だ。僕達の行つてゐた間の最後の夜に此の非常呼集をやられ光一つ無い眞暗な部屋で武裝を整へて集合したものだつた。豫期だにしなかつた非常呼集の事として初めは何だか解らなかつたが、ともかくにも此の經驗を爲し得た事は大いに喜ばねばなるまい。そして部屋を眞暗にすると云ふ一つの理由は整頓の正否を間接に検討してゐるのではなからうか。此にも亦整頓の偉大さが見出されるのである。整頓の正確なる者は暗夜に於ても素早く武裝が爲され、何等狼狽する等と云ふ様な事はない。是く考へる時、軍隊で行はれる訓練の一つが決して無駄に、無意味に行はれるのではない事が、能く察知出来るのである。又軍隊に居る間は氣のせいとか、何時も心の緊張を感じて居た。午前六時起床喇叭が廣い兵營に反響する時思ひ切つて暖かい封筒を飛出し、手早く服裝を調へて朝の點呼を待ち、其れが終れば七時迄に班内の掃除を爲し、其の間手の開いてゐる者は洗面し、炊事場に飯をとりに行つて班内に配給し、七時朝食。朝食後何時から何時迄何々を、何時迄此々と、其の規律の嚴格なる事は素晴らしい限である。それでも兵隊さんほどん／＼やつてのけ、尙餘分の仕事迄すると云ふ風である。併し乍ら此の規律といふ點について自己を振り返つて見る時、多少の境遇の差異こそあれ、此んな嚴格なる規律が果して全ふせられてゐるかは極くあぶなつかしいものである。吾等二組の入つてゐた第二中隊の中隊長山田少

必要があると思ふ。元來男子たる者は常に正々堂々として行動し、口を聞く場合も正々堂々と明確にやるのを以て尊しとしてゐる。此の美點は軍隊で無くしては、兵隊さんでなくては聞かれないのであらうか。いや其れは唯軍隊や兵隊さんの獨占物ではない筈だ。平素の心構へが引きしまつて居れば此の位の事は誰だつて言へる筈だ。殊に男であり乍ら物を言つた語尾の音が明確に出ない者が數多ある。女性であれば、其れが可憐とても言へよう。併し堂々たる男性にとつては何等の特典も無いのだ。否むしろ是様な人間は社會の敗北者として永久に立つ事が出来ないであらう。言語の明確なる者は、必ずや精神も強固なる者であらう。此の點吾等が大いに考へさせられる餘地を見出すではないか。次に規律であるが、いやしくも軍隊の一日の生活は規律一點張りでグングンやり抜かれるから、初めて來た者は大抵面喰つてしまふ。起床喇叭から消燈喇叭迄の總ての作業が喇叭の響と時計の長針、短針の動きに依て爲されるのであるから相當な緊張を要する。さう言へば彼等は一年中緊張してゐるのかも知れない。そして其れが遂には習慣性となつてしまつたのらしい。晝の演習の疲れに綿の如くなつた體を封筒狀の寢臺に押し込んで、故郷の夢や、楽しい除隊の夢を見てゐる兵隊さん達の耳に慘酷な？非常呼集の喇叭が鳴り響けば、何んな眞夜中でもいや應なしに飛び起き、手早く武裝をして集合しなくてはならないの

尉が此んな事を言つて居られたのが記憶に新しい。即ち『規律の無い人間は何をやつても駄目だ。可愛想であるが世に立つ事は出来ない』と又近時の日本青年の間には徒らに歐米化するを以て誇とし、軟弱にして吾が國獨特の建國精神を忘却せんとしてゐる者が數多あるに際し、彼等軍人が如何に質素であるかと云ふ事に就ても考へなければならぬ事である。とにかく彼等の總てが質素であつたのは云ふ迄も無い。實費主義にして少しの無駄も見出す事が出来ないのである。そして總てが國産品愛用者で何一つとして目新しい外國製品を手にしてゐないのが實に嬉しかつた。僕達も大いに質素にやらう將來質素を旨として立つ人間とならうではないか。質素は、殊に幼少時代からの質素は、やがて人間の中の人間を造る事が出来る。乃木大將は是く迄の偉人となつた。一體何が故を以て彼は神と迄仰がれる偉人になり得たのであらうか。其れは彼の父が彼の少年時代に際して、あくまで質素を旨とする所謂軍隊式を以て教育の任に當りし爲である。幼少時より質素の精神を植えつけた彼は成人するに至るも、尙更に質素な生活を送り、嘗て學習院長を奉職せし頃、其の生徒にも常に軍隊式を以て臨んだと云ふ事は、如何に『軍隊式教育』の偉大なるかを物語つてゐるに外ならない。最後に武勇について少しく述べて此の拙稿を終へ度いと思ふ。兵營内に於ては朝食前及夕食前に銃劍術、劍術、軍刀術等の練習をやつてゐる

る。おそろく其他にも餘暇がありさへすれば常に武術の鍊磨を怠らない様である。酷暑、酷暑も滿洲の曠野を思へば何のその、能く耐え忍んで年中武術の練習に餘念のない彼等の元氣は眞に天を突いてゐる。屢々中隊對抗、大隊對抗、或は聯隊對抗の武術各試合が開催される關係上、其の練習の度にも實に激烈を極めたものであるらしい。そして練習中に於ける彼等の態度は眞劍其のものである。一突き、一突き、手下から繰り出される銃劍は氣合諸共、流星の如く敵の心臓、咽喉部に突きこまれる。轉けては躍りかゝり、突きつ突かれつ、唯意氣との激しい争ひ。肉破れて血滴るるとも尙屈せず雄々しく對抗する彼等の燃ゆるが如き闘志こそ皇國日本を守る偉力となるのであらう。『日本強し！』太平洋上波高きか？ 北滿に刻々危機迫るか？ 波起らば起れ、迷雲狂はば狂へ、吾等更に恐るるに足らじ。吾等には吾等の強き軍隊があり、強き國民がある故に。

## 亞細亞を守れ

五年 山田 惠一

聯盟脱退！ 獨立獨往！ 孤立！ 吾人は毫も孤立を恐れてゐるものではない。畏れ多くも聯盟脱退に關する詔書の中にもある如く、帝國は友宣を重んずることに於ては決して他

國に下るものではなく、假令脱退するも聯盟構成の各國との國交は決して變るものではない。けれども認識不足、疑心暗鬼の國際聯盟の干渉を受け、或は他國にして之を強ふるに於ては須らく名譽の孤立を守り、極東の吾世界の雄邦として東洋永遠の平和の爲に、亞細亞人種の世界的地位確保のために邁進すべきである。

聯盟は帝國代表の毅然たる態度に接するや、或は道德的制裁を云爲し、或は委任統治の奪還を論じ、甚だしきに至りては經濟封鎖をすら論議し始めたのである。我等は經濟封鎖を恐れるものではない。帝國は振興滿洲國と共に悠々自給の計を構て國力の充實を期すべきである。帝國が此等の偉大なる使命を全うせんが爲には數多の困難辛苦が前途に横つてゐることを覺悟しなければならぬ。我等は大亞細亞の極東の平和の爲に、舉國一致臥薪嘗膽以て前途の盤根錯節をきり開かなければならぬ。國民の協力一致の精神こそ、帝國を蔽ふ妖雲を雲散霧消し、天日期らかに光り、極東、世界の平和を實現せしむる一大原動力なりと信するのである。吾人は極東並びに世界の盟主たるの責務をつくすべきである。

+

+

+

## 皇道の精神を以て 滿洲國に泣め

五年 小野 豊久

滿洲國は日本の生命線である。その意味は單に經濟的であるばかりではない。否寧ろそれは、より多く道德的なる意義を有つ。その故は、我々日本民族に與へられたる使命は、混沌たる中に秩序を見出し、理想の世界を造り出すに在る。彼の伊壯諾、伊壯冊二柱の大神は、その日本創造の始めに當つて、「この漂へる國を造り固め成す」と仰せられてゐる。之こそ日本建國の精神であり、眞の皇道である。然るに我が東洋の状態は、過去數十年間、殆ど混亂と無秩序の連續の如きものであつて、東洋の平和は確立する所なく、今、尙不安定の状態を續けて居り、蒙古、西藏、新疆等、何れも國內動亂の渦中にある。この混亂は延いては東亞全局の動亂を誘發し、亞細亞民族全体の上に大なる問題を投げかけて居る。この「漂へる」亞細亞の天地に、秩序と統制と、永遠の平和を與へ得るものは、實に、我が大日本帝國を措いては他にあり得ない。これこそ我が建國の精神であり、我々日本民族の本然の責務であり、使命である。この大使命の第一の具現が即ち、滿洲國建國の助成であるのである。滿洲國に先づ平和の

理想郷を造る、これ即ち東洋永遠の平和の基礎である。然れどもこの理想郷の實現は、固より容易なる事業ではない。我が日本精神の何たるかを理解し得ざる歐米各國は、滿洲國獨立の承認さへ躊躇して居る。彼等は日本を誤解し、日本の爲す處を領土的野心に基くものと憶斷して、正當なる我行動に攻撃を加へたので、我等はあらゆる犠牲を拂つて之を防いで來たが、今後と雖も前途に尙幾多の迂餘曲折あることを覺悟しなければならぬ。更に滿洲國內の政治行政の備、産業の開發等のことは、今日飛躍的に着々實績を收めつつあるとは云へ、この地は永き軍閥の秕政に荒されたる土地であり、且廣大にして未開の原野である。之が開拓には尙我等の多大なる犠牲的協力を必要とするのである。然れども先哲は曰ふ。「天の大いなる任務を或る人に下さんとするや、必ず先づ之を苦しめて、その災厄に堪え得るや否やを試みる。」と。又曰く「艱難は汝を玉にす」と。即ち、艱難なくしては立派なる結果は得られないのである。我等日本民族の使命は「漂へる國を造り固め成す」に在る「造り固め成す」任事が困難や艱苦の伴はざる筈はない。その困難、その艱苦を、乗越へ、克服して、理想の國家、王道樂土を實現せしめる、これ我等の傳統的民族精神である。日本は今や内外共に非常時にある併しこの難局は、敢へて悲觀すべきものではない。この苦しみは生む爲の苦しみである。山に登る爲の艱難である。それ



は實に我國民の大飛躍に與へられたる大試練であつて、洋々たる前途の光明に浴すべき道程の苦しみである。國家を金玉となす上に當然經過すべき荆棘の道程である。

くろがねの的いし人もあるものを

貫きとほせ大和だましひ

浦安の國、平和の理想郷を造り上げんと欲する我々は、明治大帝の、この御製の大御心を体して、鐵の如く強く固き意志を以て事に當らねばならぬ。再ひ言ふ、今や吾人は日本民族本來の精神、確固不拔の信念を堅持し、以て皇道を宣揚し滿蒙の天地に王道の樂土を建設すべく、十分善隣の誼みを盡さなければならぬ。

## 曙の燦明を求めて

五年 北村 辰夫

二十世紀の世界は修羅の巷に混亂し人心は動搖し將に世界暗國たらんとする時只一人東洋の一角に曙の燦明を載くものあり。而れども未だ、太平洋波高く、黒潮の怒濤は、荒れ狂ひ寒風膚を貫く北風は日本海に吹いてゐるではないか。この波こそ近き未來に日米會戰の仲介となり、この北風こそ今を去る二十幾星霜の過去に、世界に冠たりしバルチック艦隊を撃沈し「皇國の興廢此の一戦に在り各員一層奮勵努力せ

は完成せられしとして今又、昭和維新をして光輝ある日本歴史の一頁を輝かしむべきである。既に吾等は勇しくも日本國民の華として忠勇義烈名譽ある肉弾三勇士を初め數多無言の勇士を日本否、世界の歴史に筆づけせしめた。新しき日本理想へと邁進する、新興日本は、支那、滿洲と共に一致團結して財界に政界に其の他あらゆる方面に於て新しき大氣に生育せる新人物がその覇權を握らなくてはならぬ、太平洋は靜まり北風は止み新しき平和はよしや克復せられたりと雖もその海底深くに鯨鱧の潜んでゐることを忘れてはならぬ。

おお、嚴然と聳ゆる大山の上に迷々として漂つてゐる暗雲を吾等は此の流動せる雲を破りて晴天を求めねばならぬ！日本國家の爲に！

我等第二の國民よ、よく己れの責任と新日本の意氣と理想を自覺して新生の改革の道に邁進すべきである。

## 青年よ、雄飛せよ

四年 藤關平三郎

諸君。世界を家とせよ。此の思想が在り、此の實行が在つて、始めて我海外發展に永遠性が加はるのである。實に此の世界を家とする氣概は、我國民發展の要素であります。我が列聖の御宏謨、これを紹述せられたる歴代の遺烈、又此の遺

よ」と旗艦の帆柱高く信號の旗を摩かせた風ではないか。曙の燦明肥沃の黄土、それが總て、平和そのものの源であらうか。極東斯くなりとも雖も百尺竿頭一步を進めて世界を見れば歐洲の空に、北米のロッキーターには暗雲悠悠々と漂ひ、時來らば雷鳴電光東洋を襲はんとしてゐるではないか。これが果して眞の平和であり永續し得る平和であらうか。而るに世界は今尙世界平和克復の先導は日本に在るを認めず何時しか我等の辨明認識不足より國際聯盟を脱退せしめ益々世界を闇に傾けんとしてゐる。かく世界が東洋に血まなこになつてゐる時奮然極東の一角より現れ滿洲國を獨立せしめ何時しか東洋に、平和の五色の旗を彩らしめた。これぞ日本傳統の精神大和魂を胸深く刻んで好機來れと待ちかまへて居た日本男兒の意氣と力との賜である。かくも強き力を以て、腐廢せる日本社會は今や一步革新への途を辿つてゐる、今假に此の非常時日本を背おつて立つ可き政治家には既に黨派争は消え政黨一致國策協定に務めてゐるではないか、而して經濟上にも既に資本家の獨占は衰へ、尊き力と汗とを持つ勞働者達の活動時代だ。嗚呼今將に理想に到達せんとする現代の社會をして更に一步更生せしめるものは須らく吾等青年でなくてはなりません。青春の若き血と肉を持ち文化の輸入された新時代に教育せられたる、新しき頭腦を有する吾等青年こそはこの來る可き、社會の新生を覺醒せしむるものであります、明治維新

烈に依つて現れたる明治維新の宏業、五個條の御誓文、悉くが此の世界を家とする大信念、大抱負に出て居るので在ります。近くは昭和の年號の起源であると云はれてゐる『百姓昭明萬邦協和』の文字も、充分此の大精神がうかがわれる、然も此の大精神は實行に依つて、確固たる實事に廣大されるのであります。此の實行の妙味と云う物が實に得がたい物であり苦しいと云へば苦しい、然し其處に眞のバイオニヤとしての喜びがあるのであります。諸君。世界を家とする此の思想さへ實行するならば、今日我々を歓迎する處は到る處に在ります。南米諸國はもとより、南洋にも、新南群島、滿洲國をしてアフリカにも我々の若くして有爲の驥足をのばすべき所は多いのであります。現代日本が求めてゐるものは、かゝる實際的英雄であります。實行的の世界的人物であります。勿論我國海外發展のバイオニヤであり、指導者であります。古人は『舜何人ぞ我何人ぞ』と云ひました。實に味ふべき言葉ではありませんか。艱難の中に良く玉成し、大成することこそ我等青年の信念でなくてはならないのであります。我民族が、神代以來、常に憧れの眼をそ、ぎ來つた滿蒙の曠野には五色の新國旗が、秋風に高らかに翻つて、日本の青年に呼びかけて居ます『日本の青年よ、我が野を耕し、我道を開拓せよ！』と。ひさしく暗雲にとざされ、生活難の重壓の許に呻吟して人生行路の難きをかこちつ、ある昭和日本青年は、ま

さに耕すべき田園を、こゝに見出したのだ。いやまだ南米には、足跡を印せざる廣野が果を知らず續いている、我々は此に渾身の力を振つて開拓すべき新大陸を發見したのである。我々は此の滿洲——？と富の滿てる——と南米とを異境と考へてはならぬ。南米、滿洲は我々にとつて、實に未知の、そして？を含める故郷なのである。我々我が民族の歴史は、常に大陸に對する憧れをもつて動いてゐる。大陸政策は、實に上古以來の古き／＼傳統なのである。諸君！試みに歴史の本を出し開國の第一頁を開けて見給へ！神武天皇の御東征が即ち移住の歴史であります。神功皇后の三韓征伐亦然り、天智天皇の時代までは、我が民族は雄々しくも玄海の彼方、大陸の一角に據つて國威を東亞に輝かして居たのである。然し此れらの國內で力を延べる事の出来ない勇力の徒が、八幡船に乗つて支那沿岸から安南以南にまで及んだことも、我々の學んだ有名な歴史物語りである。此の八幡船に身を投じたる鬱勃たる日本人の海外發達には、半分は海賊的であり半分は征服的であつた事は何人も否めない事實であります。又此れにより日本文化が展開された事も亦、見逃すべからざる事實であります。其の後此の半海賊的、半征服的、發達は純然たる貿易商となり、これによつて西洋の文物が續々輸入されたのであります。然るに天智天皇の時、朝鮮白村江の一戦に、惜敗した我兵子の鮮血が山野を染めた事により、神武天皇以來

の民族の雄圖は、一朝にして地に委せられたのであります。以後、我等の祖先は、久しく大陸からノック、アウトせられて、所謂島國內で骨肉相喰むの醜態を演じなければならなかつたのである。然し中世時代と雖も日本は大陸を忘れてはるなかつた、其の證據に、豊臣秀吉は一度天下を席卷するや、ただちに大陸に兵を送つて大明國と雌雄を決したではないか更に明治維新以後の日本に至つては、滿蒙を離れては一日も成立しなかつたのである。内に於ては王政復古の聖業であつたが外に對しては萬里の波濤を開拓せんとする、古來の雄圖を遂行せんとして行はれたものである。諸君、我等の先輩は滿蒙の爲に、多大の犠牲者を出している。先づ第一人者として西郷隆盛であつた。彼は胸に雄大な東亞の經綸を抱いていた、然し意見合はつ、遂に空しく城田の露と消えたのである。我日本人の民族性が海外發展に付いて素質的に適してゐる事は、以上の歴史上の實事を見て明瞭である。此處に今一つ重要なことが在る。それは我々が農業的に優れてゐると云う事實であります。即ち今日我々を最も歡迎して呉れる南米諸國殊にブラジルが欲してゐるものは、此の農業的勞働者である日本人はこの農業的勞働に最も優れてゐると同時に、非常に從順勤勉であります。かのイタリー移民も農業としては優れてゐるが、日本人程從順で勤勉でない。此の點では南米に於て日本人が、斷然他を抜んでゐるのであります。北米の排

日問題の如きも、我が農民の優れたる手腕に對して、米國農民が對抗しきれなく成つたのだとも考へられるのであります。然しながらブラジルを始め南米諸國では、此の競争者がありませんから、従つて日本人勞働者排斥問題の種子がない、此れ即ち日本人の歡迎される所以であらう。然し我日本人も缺點はもとよりあります。即ち我々は長い間封建制度の遺習を受けて未だ世界的に目覺す、國際的訓練を積んでいない、所謂島國根性なるものは、海外發展に對し重大な缺點であつて我々はどうしても此れを匡正しなくてはならないのであります。即ち海外に於ては其の土地に永住するは勿論、其の土地の人々と共に共存共榮の方針の下に、あくまで其の土地の文化の開發に貢獻しなければなりません。此れが私の『世界を家とせよ』の思想であります。

明治維新の時、封建武士の子等は、我が故郷を棄て、藩主の命に背き、一身を挺して斬首の極刑に處せらるゝも厭はず、東奔し西走した。實に維新の志士等は國家大業を前にして、眇たる自己の生命を戀々として顧みてゐる暇が無かつたのである。一步誤れば三千年の歴史が空に歸する重大事であつた。そしてそれが何人にも明らかに分り、當時の青年武士の胸にはひし／＼と「邦家危し」と感ぜられたのである。故に薩長の健兒を先頭として、全國の青年武士は、我劣らじと奮ひ起つた。然るに滿洲國の創業に對し昭和日本の青年は維新の志

士の如き熱情と中心を有して居るか。否、其に非常なる熱情の違ひがある。青年の多くは、滿洲建國を以て、明治維新程の重大事なりとは考へないだらうか？……………私は旺盛なる意氣と強健な肉體を以つ日本青年が大なる野心を抱いて、新國家へ大學して渡つて行く事を切望する。私は諸君に建國の大業に参加せよとは奨めるが、吉田松蔭や、橋本左内の如く刑場の露と消えよと奨めるものではない。維新の志士を待つものは悲しい刑場だつた。然し同じ志を有する我々には、愉快なる男性的生活が待つてゐる。我々の前途は洋々乎として輝き満ちてゐる。諸君、私は未來に、否、數年後に、大興安嶺の下に或はセルパスの大廣野に我々の手に依つて拓かれた新しき村落が榮へ、何百頭と打續いた離れ飼にしてある、のどかな馬の牧場を想像して見給へ。實に雄大で、男性的ではないとは思はないか？そして銀翼軽く白日に輝かす大型飛行機が、黑龍江、或は大アマゾン河の上空を大鵬の如く飛ぶに至る事を確信して、大陸へ雄飛せられん事を切望して止まないものである。願くは自重自愛して、大なる野心を持つて、あらゆる困難を突破していただきたい。私は最後に天に向つて『青年よ！野心的であれ！雄飛せよ海外へ』と叫びたい。

## 行け満洲へ

三年 上村文太郎

吾國が土地狭く、人口過剰であると云ふ事を論ずるは、今更云ふ迄もない事である。人口増加に關聯して、食糧品の不足を來し、遂に建國以來瑞穂の國の名と實を以て、著名であつた吾國にも、暗澹たる雲が襲來して來つた。即ち年々七八十萬の人口が増加し、其れによつて諸種の物資が不足を來し之を海外より多く迎へてゐる事である。識者も事を憂へ、政府も悟る所ありて移住を奨勵してゐるが、悲しい哉!! 邦人の海外發展には、由來障礙が多い。素より吾が國は、公明正大な意を以て、天産資源の開發に専念し、相互の福利を増進せんとするのみである。然るに列國は之を誤解し、未開の地、未開の寶土、未開の沃土あるに拘らず、或は人種上、或は經濟上の理由に依つて、門戸を閉鎖され、世界到る所、排斥されるは何たる残念ぞや!

然るに喜悅せよ!! 滿洲國のみ邦人移住を招くとは、行け! 滿洲へ、幾多の英靈を、日清日露及び現在の事變に於て、失ひそして彼等の爲に、遂に獨立した滿洲國へ。幾億の資財を投じた滿洲へ、人跡未踏の森林、鬱々蒼々と繁茂し、物資の無盡藏なる滿洲へ、吾が國に於いて、山間僻地と雖も、人跡

らした。始めて氣付いたかのように此方に向けた労働者の面にはありありと憎惡の色が浮んでゐた。赤銅色の骨高い頬、鋭い目、たくましい胸、労働者のがつちりとした体から汗が流れてゐる。夏の太陽の照り輝く炎天の下に、人も馬もだらけ切つてゐる。此の眞晝の中には、確かに驚異的な彼の存在であつた。面をむけた労働者は「チエツ」と舌打ちすると僅かに荷馬車を傍によけた。しかし自動車は通れそうにもなかつた。運轉手は少しむつとしたらしかつた。労働者はそしらぬ顔で仕事を始めようとしたが、やはり彼の純情さが許さなかつたのであらう。馬を又片方へ退けた。道が開けられると白い煙とガソリンの匂を残して、自動車はすべつていつた。この光景を見ていた僕の頭には、文明と人間といふ皮肉な關係が、鮮かに刻みつけられた。皮肉だ、矛盾だ、人間が文明を生み、その爲に人間が苦しんでゐるではないか。自動車は横行する今日、あの荷馬車は段々と、消えてゆくだらう。それによつて生活をうしなはれる人々が何人あらう。力の限り働いても、彼等は文明に勝つ事を許るされない。荷馬車ばかりではない。新しく發明されて行く機械さへも人間の力を壓倒して行くではないか。もし機械ばかりの世になるとすれば人間は、一体どうすればよいのか。文明發達の今日、人力が壓縮されつゝある時、明日といふ日を前に、新しくなげかけられた疑問だ。我々は文明の本質を凝視し、確認することに

未踏の地なき今日、彼と吾とを較べんか、實にくゞ別世界に存在するを覺ゆるのである。嗚呼!! 身体強健にして、意志剛健にして、希望に燃えて、後世日本使命を雙肩に擔つてゐる若人よ、發展の餘地なき母國を去り、滿洲に於て活動せんとするは男子の本領ではないか、發展隨意な滿洲に於て、汗、油をしほつて開發に従事する愉快さは、到底男子ならでは味ひ得ぬ事ではないか、日本人の手足を十二分に伸し得る所は、滿洲を除いては、他にないのである。然し乍ら、寶土沃土と雖も、路上に金塊が四散してゐるに非ず、市の如く、紅玉が實つてゐないのである。故に彼の地に渡航せば、永住の覺悟をして、不撓不屈の精神を以て、艱難に堪へ忍び、彼の國に歸化して、第二の母國たる準備を爲す覺悟を持つべきである。「人間到る所に青山あり」男子宜しく、滿洲に雄飛すべきである。

## 文明が生むもの

三年 馬場俊馬

運轉手は何度も自動車のサイレンを鳴してみたが、前方にある荷馬車は依然として動かかなかつた。荷馬車よりも砂を運んでゐる労働者にはこのサイレンが聞えないのであらうか。せつせと仕事をしてゐる。運轉手は又ブウブウとサイレンをな

よつて、人類の幸福の道を辿るべく努めねばならぬ。

## 慈によつて生ずる物

三年 松村惠喜

いつくしむ。このことは争耳を續けて居る現今の世界から國家主義を捨てて、愛他主義に轉換させるであらう。然らばこの社會は平和な樂土となる。

帝國は非常時に再會したと言はれるが、これも慈を失つた民族相互の争、即ち民族的國家主義が源である。もとより帝國は誤れるこの主義とは相入ることの出来ない精神を過去に於て世界にあらはして來たのであるが、一般的世界の主義の爲にしりせられたのである。軍備に、經濟に、これら國家主義が露れ民族、國家を賭して争を續け、而して各人は苦しんで居る。もとより民族は國家を建設して發展をすべきものであるが、この自然の法則は己の國のみの發展するのを悦ぶ性質のものではない。

今かりに世界の一人／＼が慈で困つたとすれば如何。

個人の争は消える。したがつて民族、國家の争は現世を去る。故に明日の世界、一時間後の世界、一秒後の世界は慈で發展すべきである。されば我等若人は慈を持ち、慈で終始一貫することを意に掛けるべきである。我等の生活、勉學は誤

れる争の元動力の製造に非ずして、人類、民族の爲の勉學でなければならぬ。

然し現世にも慈はある。ただ己の爲の慈であるが、至つて尊いものである。

父母の慈特に母の慈は古今を通じて、變化もなければ、その心はあまたの事實から、僕等の見たり聞いたり、又受けたりしたことから證明される。母は己を空しうして、子供を愛し、子は之によつて力附けられ、最後の勝利を得る。この度が深い程、子はこの母のかたじけない心に報ひようと努力する。

師の慈、之又然りだ。ただ我等至らざる若人は師の導を受けて居る間はさ程に感じないが、學校を去つてから一層深く感じられるらしい。この點注意したいものだ。

長る者の慈、之は我等彦中生は、上級は現今以上の慈を以て、下級に接し、導くべきだと思ふ。下級は上級に對してあくまで順であり、敬で接しなくてはならぬ。かうして始めて眞の秩序ある規律が成立するものである。

萬事慈を以てすれば眞に道德的の物事が出来るのである。最後に我等はあくまで男性的の慈を持つことにとめたいものだ。

× × ×

科學的の教授法を執つてゐたものである。唯、小學校の教授は、上級の學校に授くるものを、稍簡略したものだと言つても差支へないものであつた。而して偶々應用方面のことを引證するとしても、多くは兒童の實際生活に何等の縁故もない、無趣味坦々たるものが多かつた。左様な次第であるから、兒童等には理科に對して何の興味も起らねば研究心も誘起せないのみか、却つて理化は窮屈的な學科、面白くない科目としていやがられる傾向にあつたのは事實である。

然るに最近の進歩した理化玩具には、物理の原理や、化學の法則などが極めて平易に、滑稽的に適用されてゐる。そしてこれ等の理化玩具は、凡ての子供等が衷心から愛玩して止まないものである。されば彼等はこれを玩弄する間に不知不識、物理學の原理や、化學上の變化なども自發的に會得するに至るのである。これを彼の學校にて厭々ながら強制的に教授を受くるのに比して、實に雲泥の差ありと謂はねばならぬ。理科教授の主要目的は、單に無味乾燥なる事實に關する知識の獲得にあらずして、兒童の觀察力や實驗力を旺盛ならしめ、これに依りて正確なる論理的結論を誘致する力を發達せしめる位である。だから此の實際論偏重の理化教授を根本的に打破し、僕の主張の様な理化玩具を仲介物として教授を進めなば、難澁なる教授も、忽ち歡樂の場裏に轉換し、眞に潑瀾たる理化教授は實現されるであらう。かく論じ來れば理化玩具の使命は重且つ大なりと謂ふべきである。

—— 二 ——  
「科學玩具と創作力の養成」

凡ての兒童は、活動的に物事を破壊し、又建設する性能を有つてゐる。しかも、時々刻々に變化し、新境を好み、不思議な喜ぶ氣風を具



研究

科學玩具及びその應用に就きて

五年 井上八右衛門

—— 一 —— 「科學玩具と理化思想の普及」

如何にして我國民に理化思想を普及せしむべきかは、文部當局を始め、一般教育者間の重大問題とされてゐる状態である。さればその方法として文部省は曩に全國の中等學校に多大の理化實驗費を分配して生徒各自の實驗に親ましめ、續いて小學校兒童に對しては、第四學年以上は毎週二時間づゝの理化教授を加設し、尙二、三年間に尋常科より高等科に至るまでの理科教科書も改纂して、銳意該科の普及發達を企畫し、更に國家としては大正六年東京市に財團法人理化學研究所を設立し、發明協會を組織するなど、あらゆる手段方法を講じざるにも拘らず尙理化教授の遅々として不徹底に終りつゝあるは、そも何故であらうか僕は、その原因について左の様に考へてゐる一人である。

自來我國に於ける從來の理科教授は、餘りに純正科學的の取扱ひに偏し、應用方面を闕却してゐたかの憾みがある。例へば中學などで教授する理科教授の方法も、小學校で指導する方案も、殆んど同様の純へてゐる。理化學應用的玩具には、必ず、動くか、變るか、唱るか、三つの要素を含んでゐるものである。この三要素こそは、兒童の潑瀾たる心理状態と全く一致してゐるので、そこに偉大なる創作教育が施されるのである。或る人が玩具の生命は創作なりと絶叫したのも、味ふべき眞理なり。それ故、玩具を考案製作する人は、是非とも兒童の心理に精通しておくことが肝要である。我國に於て現今森永製菓會社で外箱藝術といふのを、時々多額の賞金を投じてやつてゐる。斯様に面白い理化玩具を知識慾の旺盛な子供に與へることは恰かも大早に蒙雨の天恵あるに等しく、彼等はそれを觀察し玩弄する間に、幾多の疑問をも解決する場合も少なからずと思ふ。稍々知識の進んだ兒童は、一つの斬新な理化玩具を得れば、直ちにこれを手本として同形のもので模倣するか、又はこれに刺戟されて他の玩具を創作するのである。彼の發明家が尙尙複雑なる機械類を發明するに至つたのも、當初は單なる玩具、その他のものに教へられて、工夫し製作して汗と脂の結晶として成功したものである。例へばライトは彼は父より貰ひし玩具によりて、現今航空界の奇蹟と呼ばれる飛行機を發明し、エチソンは小形の電燈に暗示を得て、娛樂界の寵兒たる活動寫眞機を案出したのである。その他これに類する例を數へれば、枚擧に遑あらずであらう。吾人は幸にして現代に生れ相共に物質の文明を謳歌しつゝあるが、さてその文化の依つて來る原因を訊ねれば、それは云ふまでもなく大發明家、大科學者が苦心慘澹裏に、工夫創作した利器の賜物に外ならぬのである。而もその大發明大發見の根源の多くが、單なる玩具に教へられたることを思はゞ、僕は爰に特に筆を大にして、科學玩具は文化の先驅なりと賞めたゞへたいものである。

サイエンス即ち科學といふ語は、随分古くから學者間に用ひられてきたものであるが、玩具の上に、科學の文字を冠する様になつたのは、最近のことである。某書籍に掲げてある玩具は、凡て吾が國古來の土俗玩具であつて、勿論科學的のものには全く見當らない。その後、西澤留政氏の編纂された書々の中には、世界各國の土俗玩具を載せられてあるが、獨り獨逸の玩具のみは、どこかに物理學の理法を應用して活動するもの、散見するは、聊か意を止むるに足るものがある。又武内眞一氏の物せられた、日本玩具集の中には、竹笛、竹鐵砲、龍吐水、鳴り獨樂、等理學應用のもの七八種が編み込まれてある。

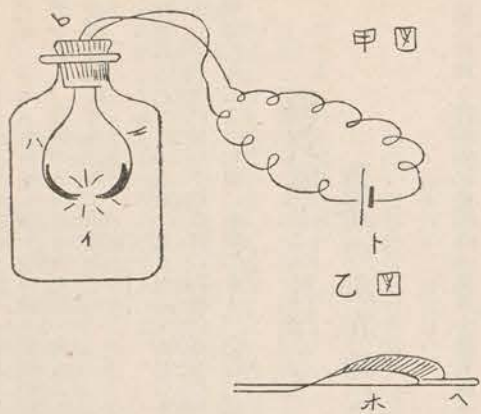
大正三年東京上野の不忍の池畔に大正博覽會が開催された時、全國より出品した玩具を調査した表に依ると過去十年前とは全く隔世的の理科玩具が多數陳列してあつた。今その主なる物を擧げると、空氣銃、自動機、汽車、飛行機、双眼鏡、音響機、ポンプ、幻燈機、等であつた。併當時の科學玩具は、僅かに動く、僅かに鳴るといふ位のもので、その適用及製作の方法なども、甚だ幼稚なものであつた。そして愈々科學玩具として一般人に持てはやされる様になつたのは、歐洲大戰終結後の七八年間のことである。

論ずる迄もなく歐洲大戰の原因は、英獨二國の物質的文明の激争が隣接國及び日本や米國にまで飛火したものである。併して戦争そのものは、勿論國と國との戦ひ、人と人との戦ひに相違ないが、これに使用した軍需品、即ち大小砲、彈藥、毒瓦斯、航空機、潛航艇及びその他の交通機關等は凡て科學を應用したる、最新最優の銳器であつて、

— 四 — 「科學玩具の製作法」

一、簡單なる電燈

第一圖の甲は簡單なる電燈の見取圖で、乙は發光部の作り方を示したものである。之れを作るには、二十番位の綿卷銅線二三尺のもの



の二條をとり、各線の一端を金鎖でたゞひて平にし、更に(ホ)の如くまげ、その中に一寸許りの白金線を、(ハ)の様に包んで確と金鎖でたゞきつけるのである。(イ)は小形の瓶である。(ロ)のホルク程に二つの錐孔を穿ち、其の各の先に白金線を貫いて(ハ)(ニ)の如く曲げ、白金線の先端が僅かに接する様に作る。今稍強い乾電池(ト)の

の二つの柱に、銅線の各端をつなぐと、兩白金線の接觸部に可愛らしき電燈を見ることが出来る。

白金線は電流に對して強力の抵抗を有するもので、こゝに説明せる電燈にても、抵抗の少い銅線と銅線との接觸であれば、あれ程迄の強

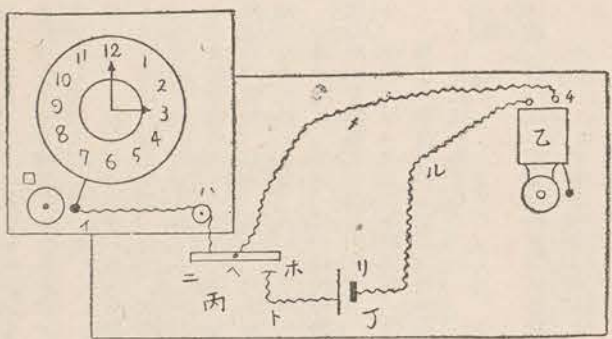
各國とも精を極め、秘を盡しその優秀なるものが遂に最後に勝利を制したものである。換言すれば科學との戦争であつたことが肯定される

殊に吾が國は戰前獨逸より莫大な染料藥品、及びその他の機械類を輸入して来たものであるが、一旦國交斷絶するや、それ等の物資は悉く杜絶したので、これがため吾國人の蒙つた損失と狼狽とは實に多大なものであつた。これと云ふも、畢竟吾國人が平素より科學に對する研究用意が足りなかつた責罰だと云はねばなるまい。換言すれば吾國は戦争に勝つたりと雖ども、科學戰には全く敗北したものであると謂はねばならぬ。歐洲戦争に依つて、吾々の享けた活教訓は澤山ある就中、吾國の如き四面海を環らした國柄は、常に物資の自給自足の道を講じおかねばならぬと云ふことが、痛切に感じたのである。併して自給自足の方法は多種多様であらうが、僕の研究としては理科教科書によりて得たる知識を、實地に應用し製作して、眞個の實力を養ひおくことが最要であると思へる。殊に凡ての兒童が最好愛せる玩具を科學化するとは、最も平易にして實行し易き捷徑であると、確く信じてゐる次第である。

數年前工學士中村興資平氏は、東京本郷區西片町で「科學遊具と自作」なる書を發行したが今は廢刊となつたと聞く。眞に遺憾なことであるが、更に眼を雜誌界に轉せんか、大人向きとして「科學知識」及「科學書報」がある。子供讀みものとしては「子供の科學」等は最も子供に愛讀されてゐる。書中科學に關する寫眞や記事で満載されてゐるが、各雜誌共往々科學玩具に關する記事も散見する。子供は、これに依りて多くの科學知識を收得することであらう。僕はこれを非常に嬉しく思ふ次第である。

い光りは發しないが、先端に抵抗の強い白金のあるために相當に強い光を發する。

但し小瓶内には空氣が充滿してゐるから、白金線は空氣中の酸素と



作用して、だん／＼消耗する。そこで若しこれを眞空に近からしめんには、豫めホルク程の完全なものを選び、二つの錐孔にはパラフィン、又は飯糊をその刺込みの孔に塗り込みおき、ホルク程をぬきとり、瓶底にエーテル小滴を注ぎ底部を湯氣に當てれば、エーテルは忽ち蒸發して内部の空氣は全く外部に驅逐されることになる。適當の時を見計ひてホルク程を密閉し、清水中に浸せば、瓶内は殆んど眞空になる。

依つて出来上れば停電のときに一度試みられよ。

二、時報ベル

今甲の柱時計の打鐘錘(イ)に太糸を結び付け、(ハ)の滑車より挺子の左端(ニ)につなぐ。次に長い綿卷銅線をとつて、(ハ)(ヌ)を纏て、ベル(四)に連絡させる。又挺子(ホ)の下方には、(ト)の銅線を固定し、他端は(リ)の乾電池に

つなぎ、更に銅線（ル）をとつて一端は電池の他の極につなぎ、他端は乙のベルに連絡させる。  
今甲柱時計が正に三時に達したときには（イ）の打鐘鐘は左右に振れて（ロ）のベルを三回だけ打ち鳴らす。其の都度（ニ）の端を上につくから、反対の（ホ）の端は（ト）の銅線に接することになる。此の時乙のベルも（ル）と（ヌ）より来る電流の回路によりて、リソリンと音を發し、各室の人々にも時を知らせることが出来る。  
一度暇な時にも試みて御覽なさい。

諸君はこれだけの材料にあきたらずお思になつてゐられるだろう、が併し諸君も諸君で多種多様の科學玩具を作製して國家の有意義なる科學者たらんことを切に希望します。（完） 昭和八年六月

## 滋賀縣下に於ける 舊藩の所在地に就いて

柴田良治

滋賀縣即ち我が近江の國は中央に大湖を湛へ、周圍は又秀嶺を以て廻らされてみて四季折々の眺望の良しは勿論、加ふるに氣候の溫暖交通の便に恵まれてゐる。故に我が國に於いても最も古くより文化の開けた國の一である。

歴史に依れば景行成務帝が高穴穗の宮に、又天智帝が天津の宮に御覽都あり以來益々我が近江の國の文化は急速に進歩發達した。延曆寺及び圓城寺は當時の宮寺として建立せられた。

鎌倉幕府が開かれて以來、此の國を守護したのは佐々木氏であつた。其後織田信長が安土の地を自分の居城として最初の城を築き、更に徳川幕府の世に到つては彦根、膳所、水口、大溝、小室、西大寺、堅田、山上、宮川、三上、朽木等國內到る所に藩政が行なはれるやうになつた。けれども事實に於いては其の一、二を除いては全國の諸大名が之を分領して居たのであつた。  
従つて、今日、其等諸藩の領地を調査すること非常に困難である。古くより近江の國が東海、東山、北陸の要衝の地であつたこと、この國が全國諸大名の治下に屬することが屢々あつたといふことが、この國の人々が他國の人々の文化に接する機會を多く持つ原因となり延いては宗教、學問、藝術、武術、商業等各方面に於て幾多の優れた人物を出さしめたのである。殊に近江商人は有名である。  
今藩政時代（桃山、江戸時代の我が湖國に於ける舊藩の所在地を現代の地圖を参照して書き記さう。

一、佐和山城（犬上郡彦根近郊、佐和山城）  
現在の彦根町の東北に在り所謂松原内湖に臨んでゐる背後は直ちに仲仙道に通ずる

藩主

- (1)磯野氏 京極高濂家臣の磯野右衛門大夫貞詮の舊城である其子丹波守貞政が相續したが元龜三年織田信長に攻められ落城した。
- (2)丹羽氏 信長は之を其の臣、丹波五郎左衛門長秀に與へた。併し長秀は後若狭の國に移つた。
- (3)堀氏 天正十一年、左衛門督文太郎秀政が豊臣秀吉から九萬

石に封せられてこの城に居たが同十三年八月十三日越前の國の北莊に移つた。

(4)石田氏 天正十三年かの治部少輔石田三成が二十三萬五千三百石を領してこの城に居たが慶長五年九月關ヶ原の合戦に敗れ、九月十七日徳川氏の爲落城さる。

(5)井伊氏 關ヶ原合戦の時徳川氏が大勝したので徳川家康は其の臣兵部少輔井伊直政十八萬石を封じて此の城に居らせられた（慶長六年二月六日）  
其の子掃部頭直孝封を襲ぎ翌々年八年に彦根城を築いて之に移つた。

二、彦根藩（犬上郡彦根城）

現在の彦根町の西北に在り、琵琶湖に臨んだ一岳陵の上にあり天守閣は今も尙昔のまゝに保存されて居る。

藩主

我等の彦根藩は徳川の始めより徳川末期まで其の主を代へたことなく縣下に於いて最も有力な大名であつた。  
井伊氏 直政は上野國高崎から彦根に移り上野國及び近江國に於いて併せて十八萬石の封を持つてゐた。其の子掃部頭直孝は近江國十五萬石を自分が領有し、下野國三萬石を兄の直勝に與へた。  
其の後元和元年十一月二日五萬石を加増せられ同三年十月更に五萬石を加増せられ寛永十年三月二十日更に五萬石を加増せられ全部で三十萬石を領有することゝなつた。

三、膳所（大津）藩（志賀郡大津城後膳所城）  
西南に逢坂山を控へ風光明媚な琵琶湖の最南端に臨んで居る。

藩主

- (1)淺野氏 天正十一年八月、淺野長政が甲賀、栗太の二郡に於いて二萬三百石を賜ひ大津、坂本兩城を領有してゐたが天正十三年八月更に高島郡の七千二百石を加増せられ同十五年九月五日に若狭の小濱に移つた。
- (2)京極氏 文祿四年、若狭守京極高次、八幡山からこの城に移つて、六萬石の封を賜つたが後若狭の小濱に移つた。
- (3)戸田氏 慶長六年戸田左門一西が大津城三萬石に封せられ同七年膳所城を築いた。其子氏鏑は元和二年七月二十五日攝津國の尼ヶ崎に移つた。
- (4)本多氏 元和五年本多康俊が三河の國西尾から移つて、三萬一千百石に封せられこの城にゐたが其子俊次の代に元和七年三河國西尾に歸つた。
- (5)菅沼氏 元和七年菅沼定芳が伊勢長島から移つてこの城に三萬一千百石に封せられたが同十一年七月丹波國龜山城に移つた。
- (6)石川氏 其と同時に石川忠總が下總國佐倉より來りて七萬石を領した。其の孫靈之に到り伊勢國に移つた。

(7) 本多氏 憲之が去ると同時に（慶安四年四月四日）下總守本多俊次が伊勢龜山から移つて七萬石を領した。以來本多氏は十三代の間六萬石を領してこの地に居住した。

四、水口藩（甲賀郡水口邸）  
此所は昔の東海道五十三次の中の一の宿場である。野洲川の上流に臨み後に山脈を控へた要地である。現在は近江鐵道、省營バスがこの地を通過し更に草津線に連絡してゐる。

(1) 長東氏 長東正家が初めこの城で五萬石を領有して居たが關ヶ原役に西軍に従つて敗れ除封せられた。

(2) 加藤氏 天和二年六月内藏助加藤明友石見國吉永より移りて當城二萬石を賜はつた。其子明英は元祿八年五月下野國壬生に移つた。

(3) 鳥居氏 同時に伊賀守鳥居忠英が能登國から移つて當城二萬石に封せられた。

(4) 加藤氏 正徳二年二月彼の加藤明英の子和泉守加藤嘉矩が下野から移つて二萬石に封せられた。其の子以來明經―明輝―明堯―明陳―明允―明邦―明軌―明實（二萬五千石）七代が夫々この地に居つた。

五、大溝藩（高島郡大溝邸）  
湖西高島郡の最南端琵琶湖に臨む景勝の地である江若鐵道が通じ又大湖汽船の寄航地である。附近には白鬚神社、水尾神社、長谷寺、禪智院及び藤樹書院等がある。

(1) 磯野氏 初めかの織田信長に攻められて佐和山城を追はれたる移り榮へたものであらう。

藩主  
市橋氏 元和六年下總守市橋長政が越後國の三條藩から轉じて來り二萬石に封じられて仁正寺（西大路）に住んでゐた。其後親族に二千石を分ち與へて一萬七千石を領し其の子信直から長壽に至るまで九代續いた。

八、堅田藩（志賀郡堅田邸）  
堅田町は滋賀の中部に位し琵琶湖に臨む風光絶佳の地である所謂浮御堂で有名である。

(1) 堅田氏 初め兵部少輔、堅田廣澄がこの地にあつて二萬石を領有してゐたが、關ヶ原の戦に西軍に屬し敗れて領地を沒收せられた。

(2) 堀田氏 元祿十一年三月備中守、堀田正高が下野國から轉じて一萬石を領しこゝにゐた。以來正峯―正永―正實―正富と五代續いたが正敷に至り下野國の佐野に移つた。  
（今より百八年前）

九、山上藩（神崎郡、山上邸）  
山上は神崎郡の最狭部に位する一部落である。現在此所に山上村役場あり郡境を隔てゝ有名な永源寺のある高野に隣つてゐる變知川の上流は此の地を流れてゐる。

稻垣氏 元祿十一年十二月二十八日安藝守稻垣重定が常陸國から來てこゝに一萬三千石を領した。其子重房以來太清に至るまで七代續いた。

十、三上藩（野洲郡三上邸）

磯野貞政（京極家臣）が居城した。

(2) 織田氏 信長は更にこの磯野氏を攻略し織田信澄に之を與へた信長の没後秀吉の時更に若狹守京極高次が天正十五年七月一萬石を以つてこの地に封せられた。

(3) 京極氏 元和五年八月分部光信が伊賀上野から移つて當城二萬石に封せられた。以來其の子孫なる嘉治―嘉高―信政―光忠―光命―光庸―光實―光邦―光貞が續いて此の地の藩主であつた。即ち大溝は分部氏の舊城下町である。

(4) 分部氏 東淺井郡の中央部に位する。今では人氣寂しい一村落到過ぎない姉川の支流がこの地方に流れて居る。

六、小室藩（淺井郡小室邸）  
小室藩は淺井郡小室邸に居る。今では人氣寂しい一村落到過ぎない姉川の支流がこの地方に流れて居る。

小堀氏 遠江守小堀政一が備中國の領土をこの淺井郡に移されたのは元和五年のことであつた。

七、仁正寺（西大路）藩（蒲生郡西大路邸）  
西大路村は今日では蒲生郡東部日野川の上流地方に位する一小部落であるが其の西隣りにある日野町は恐らく西大路藩の城下町の様な寂しい片田舎となつた。

三上村は東海道線野洲驛から東方約二軒かの有名な三上山の麓にある。野洲川は南方を流れて居る。

遠藤氏 元祿十一年二月但馬守、遠藤胤親が常陸國から轉じて當城一萬石を領した其子胤將以來六代胤城まで續いた

十一、朽木藩（高島郡朽木邸）  
朽木村は湖西高島郡の中央部に位し、安曇川はこの地で二つに分かれて居る。

朽木氏 初め佐々木信綱が承久の戦功に依り朽木庄を賜はつた其子高信孫頼綱に至り初めて朽木氏と名乗つた。以て時綱以降十一代目元綱に至り、織田信長に仕へ、後秀吉に仕へた。關ヶ原合戦には初め西軍に従ひ中途で形勢非なりと見て東軍に従つた依つて戦功に依り九千五百九十石を賜はつた。其子宣綱の代には四千七百石を以つて朽木氏は斷絶した。

十二、宮川藩（坂田郡宮川邸）  
宮川現在の地圖では何處にあるかわからない。

堀田氏 元祿十一年三月、豊前守正休上野吉井より移つて當城一萬石を賜はつた。其子正朝を経て正陳の代に三千石を加増せられ以來正義まで八代續いた。

十三、高島藩（高島郡高島）  
現在の高島村は高島郡の南部に位しかの大溝の西方約四軒餘である加茂川の上流はこの地を過ぎてゐる。附近には水尾神社、禪智院等がある。

佐久間氏 慶長三年佐久間安政は佐和山の畔の古浮に於いて七千

石を賜り同五年の關ヶ原の戦後には東軍に参加した功に依り高島一萬五千石を賜はつた。後元和元年信濃飯山に移つた。

#### 十四、長濱藩(坂田郡長濱城)

長濱町は坂田郡の西北部の琵琶湖に臨み、北陸線はこの地を過ぎ湖東汽船の寄航地であり、徳川時代より相當に繁華な町であつた。有名な濱縮種の産地である。湖北地方に於ける最大の町である。

#### 藩主

#### 内藤氏

慶長十一年、豊前守内藤信成が駿河の國の府中より移り四萬石を領してゐた。其子信正は元和元年閏九月關津國の高槻城に移つた。今より約三百二十年前である

#### 十五、八幡藩(蒲生郡八幡城)

八幡町は人口一萬蒲生郡の最西部湖に近い。附近には八幡神社、長命寺がある。八日市鐵道によりて八日市に到り近江鐵道と連絡あり、東海道本線はこの地を過ぎる商工業共に盛である。

#### 藩主

#### (1) 豊臣氏

天正十三年豊臣秀次はこの地に城を築いた今尚八幡山には城跡を止める。

#### (2) 京極氏

後天正十八年若狹守京極高次が大溝より此地に移り二萬八千石を賜はつた。後文祿四年大津城に六萬石で封ぜられた。今日より三百四十年前である。

## 江州音頭の起原と其意義

四年 吉田龍性

郷土藝術界の王座として全國的民衆の寵兒たる吾が江州音頭は、實に我が居村日枝村の觀音堂に其の孤々の聲を擧げたのである、其の觀音堂の起原は愛知郡山上村の永源寺より隱居せられたる、江庵和尚其人である。

其の後此の觀音堂が兵火により焼かれたのを今の大字下枝に藤野太郎左衛門常實と云ふ豪家が有り兵火に罹つた觀音堂を再建し、其の落慶式(天正十四年七月十七日)に當日の餘興に佛敎に因む作り人形を數多く陳列し、又佛敎弘通の一段として、其の時の住職善立和尚は經文の「羯諦々々 波羅羯諦 波羅僧羯諦……」等の經文の二三句を節面白く歌ひつゝ、土地の老若男女を集め圓陣を作りて踊らしめたる事を起原とする。

斯くして生れたる盆踊は、一般民衆の人氣に投じ毎年、七月十七日年中行事の一として之を行はしめたるのである。爾來郷土の慰安として、又佛敎弘通の一方方法として、歴代住僧と村の首腦者と協力して推奨したる結果、遠近より來集する者年々其の數を増し「枝村の觀音盆」と稱して益々有名の道程をたどつたのである。

其後星移り霜を經ること二百五十餘年弘化年間に至り、時の巨豪藤野四郎兵衛は觀音堂の改築を起願し、同三年七月十七日を卜して遷佛供養を行ひ、古例に従ひ踊を催し、花笠扇等を興へて踊を競はしめ、且、音頭の文句も經文より轉じて講讀物とした、其の一代こそは、櫻

大川鵬である。

絢爛たる供養を展開せし事が實に江州音頭の完成であつた、而して其題目は勸善懲惡佛法の弘通とを目的として選ばれたことは勿論である。

先人の跡を見、事蹟を調べる時、何事にも偉大なる努力と重大なる犠牲が拂はれたることを痛感する、乏しき資料に依り簡單に事蹟を調べた丈でも、如上の史實を闡明にするではないか、擧げられた事實、隠れたる努力が、實に／＼大なる事を想像して何事に依らず先人の偉大なる功績を想ふのである。

簡單ながら自分の江州音頭に對する起源と思ひをのべたのである。

## 鳴く虫の話

三年 伊吹義雄

小鳥は聲樂家、虫は器樂家

春の野山に美しい聲で轉ずる鶯や雲雀等の小鳥達は、何處からあの美しい聲を出すのであらうか？ 小鳥達は丁度兩氣管技の別れる所に鳴器があつて特別の筋肉で音の高低を調節するのは我々の喉頭に似てゐる。ですから、小鳥達は皆人間の音樂家にたとへると、聲樂家ばかりなのです。併し蟬・こほろぎ・きりぎりす等の昆虫は、やはり同じやうに咽喉から聲を出すのであらうか？ ノー、ノー、そんなことを言つたら皆んなに嘲笑されますよ。蟬は腹にある大鼓の皮を筋肉で引張つて音を出しますし、こほろぎやきりぎりすは、その

翅を擦り合はせてあの微妙な音を出すのです、丁度人間が大鼓を叩いてウイオリンを弓で弾くのと同じやうに器樂家に當るのです。故に小鳥達は「歌つてゐる」といつても別に面白くないが、虫が草の蔭で「歌つてゐる」といふことは一寸適當でないと思ふ彼等は「鳴く」といふよりも「音樂を奏してゐる」と言ふ方がむしろ本當だらう。

蟬の樂器について

雄蟬を捕つて見ると胸部の下の所に四枚の爪形のものが有ります。背の方を背瓣、腹の方の二枚を腹瓣といひます。

この蓋を開けると、中に各々白い鼓膜があるのが見えます。蟬はこの皆の方の二枚の鼓膜についてゐる筋肉を延したり縮めたりして鼓を弾はします。するとその音が、爪形の瓣の下の空洞へ響いて、あの騒々しい音になるのです。腹瓣は、この樂器の蓋としてたゞ鼓膜を保護するのに役立つばかりでなく、制音器の役目もするのです。蟬が鼓膜を振はしながら、お尻を持ち上げ、この腹瓣と身体との間に隙間を拵へると音は高く響くのです。若し身体をピツタリと腹瓣にくつ／＼けると、音は外へ響きませんから消へて弱くなる。蟬が高い樹にとまつて鳴いてゐる様子を御覽なさい。屹度お尻を上げたり下げたりして音を高めたり低めたりしてゐます。鼓膜をふるはせば音が出ると言ふことはどうも不思議だと思ひになる方には、面白い玩具をお目にかけてやう。縁日等に行くと、鋸で蟬の形を造りその中の所へ鋼鐵の片を挿しこんである玩具を賣つてゐるのを御存じですか。あの玩具は、人が指でその鋼鐵の片を押したり離したりすると鋼鐵の片はね跳る音が鋭く響いて丁度蟬の聲にそつくりの音をした



てます。蟬の鼓膜は、その玩具の鋼線にあたるのです。さうして指で押したり離したりする代りに、蟬は自分の筋肉で押したり離したりしてあの鳴き聲をたてるのです。蟬をよく捕へる方は御存じてせうが蟬が死んでしまつた後でも鳴く？それは人間が強く指で身を押ししたり離したりすると、その力で鼓膜についてゐる筋肉が延びたり縮んだりして鼓膜をふるはせるので、まるで生きてゐる時のやうに少ざ、音をたてるのがよく有ります。蟬の楽器にとつては鼓膜は生命です。ほんの一寸破れても音が出なくなつてしまひます。それから縫針を以つて一寸鼓膜を突いて穴を開ければ、あの賑やかな蟬も雌蟬と同じやうに啞となります。

#### 蟬の一生

蟬の生涯ほど面白いものは有りません。蟬の生涯は殆んど少年少女の時代ばかりと言つても差支へ有りません。蟬は卵を木の枝の中に産み、孵つて幼虫となり、地に下りて眞暗な地底で木の根に吻を挿込んで液を吸ふ、併し其の液は滋養分が少くない故に、早く成長しない、して地中で彼等は數年間、地中生活を送つて地上に出てやうやく太陽を拜むのです。そして彼等は大喜びで立派な一人前の蟬になつたと思つてゐますが、卵を産めば雌雄共に冥土の旅を續けるのです。地上に出て死するまで、幾日位かゝるとお思ひになりますか？驚くなかれ、短いのは數日長くてもせいゝ二週間位で死んでしまひます。地中で十數年を過し、一人前になるとせいゝ二週間しか生きてゐない蟬の一生は不思議では有りませんか。十數年間も汚い仕事着を着て地の下で鶴嘴の手に、土掘仕事を續けたが、一足飛びに、立派な衣裳をつけ見事な翅を持つた紳士に生れかわつた蟬が

ほんと數日の短い間だけ、尊い日光を浴びることが出来るのです。この日光に浴した時は、どんなに嬉しいのか分りません。歌も歌ひたくなるでせう。精一杯楽器を鳴したくもなるでせう。蟬は唯もう幸福で夢中になつてゐるのです。それを「やかましい」等とがめたてるのはあまりに同情心が有りません。せめてあきる程歌はせてやらうではありませんか。

自然のヴァイオリンを弾き

夏も近づき、つく／＼法師の聲も何んもなく、物悲しく聞えるやうになるともう秋なのです。

「つれせせ」といふのはこほろぎのことで、もうすぐ寒い冬がやつて来る。さあ早く冬の着物の支度をしなければ……と云はぬばかりに細く優しく淋しくリリリ、リリリ、と蒙所の隅等て鳴く様子を俳句につくたものです。チロリン、チンチロリンと鳴く松虫、リリン、リリンと鈴を振るやうな鈴虫も皆んなこのこほろぎと同じ種類のものです。こほろぎ達の聲はどうしてあんなに優しく悲しげに響くのでせう？それはこほろぎ達の楽器の精です。翅と翅とを擦り合はせて出すのですから人の使ふ楽器で言へば、こほろぎ達はヴァイオリンと同じ楽器を持つてゐるのです。秋の夜長を淋しく調べを

つづける自然のヴァイオリン弾き。それはこほろぎです。(完)

十 十 十

## 伊吹山の野生薬草

一年 狩野 武

本縣最高の山岳伊吹山は、湖の北、坂田郡と岐阜縣に渡る大きな山岳で、本縣に屬する面積、三十六萬七千四百四十畝(約三千七百丁歩)、岐阜縣に屬する面積、五萬九千五百畝(約六百丁歩)、高さは、一千三百六十五米(約四千五百四十五尺)、と言ふ大きな山岳である。伊吹山は山麓の外全山殆ど草原で、わずかに小灌木が混生して居ます。従がつて草本類も多く、今日までに發見された数は、三千六百種、其内、薬草百三十六種と言はれて居ます。實に日本一の薬草山でありませう。内二十八種を、縣が採取縮規則を發布して採集を禁止しました。薬草の主な物を研究して見ませう。「イブキトヲノオ」薯蓣科。此の植物は、伊吹山に始めて發見されたので、此の名が着いたのださうだ。葉は表は綠色、裏は白綠色で、被針形で尖り、葉柄の本には鞘状の托葉が有り。花は大部分白色で莖の最上の一穂を成して、萼片五枚雄蕊八本の花であります。伊吹山には、九合目から頂上にかけて、多數咲きます。時季は、八月満開です。「イブキバウフウ」撒形科。莖は直立して、多くの枝を出して居ます。葉の縁に多數の切れ込みが有つて花は莖の先端に有り、花軸には小總苞が有ります。花は小さく、花瓣五枚、雄蕊五本有ります。伊吹山の八合目より頂上にかけて、八月頃に多數咲きます。「キ、ヤウ」き、やう科。根は直下し長細い、此の根は薬用となる。葉は卵形で互生して、莖の先端に開花します。

花冠は合瓣で、先づ五つに分れ紫色雌蕊は一本、下生子房であつて、雄蕊は五本有り夏の終りから、秋にかけて花が咲きます。「ツリカネニンジン」き、やう科。莖は直立し、葉は輪生で細長く、花冠は紫の鐘形で、花冠の本には萼が有ります。伊吹で多く眼に着くのは此の四種ですが、何日もかゝつて、探せば、いくらでも見つかるでせう。又伊吹山ではあまり見つかからない「タウキ」は、根をほし、臼で粉にし、砂糖でねつて食ふと、どんな胃病でも全快すると、言はれて居ます。此の「タウキ」は奥マキノスキー場の東に一面に在ります。伊吹山の薬草は、永祿年間織田信長が宣教師に命じ、外國種の薬草を移植させた。其草園は約五軒四方(約五十町四方)で草類は、三千種と言はれて居ます。





## 文苑

### 飛行機搭乗記

あ だ ち

宿望が達せられて、飛行機に始めて乗る機会を與へられた昭和八年六月二十九日の午後。一行は八人。二臺の自動車に分乗して威勢よく飛行第三聯隊の正門に著く。今迄たび／＼くぐつた門ではあるが、今日は幾分改つた感じ。案内せられて飛行場に向ふ。遙か場には幾臺かの戦闘機が威風堂々と翼を連ねて待機してゐる。そのわきに偵察機が二臺、靜かに控へてゐるのが目に入る。あれに乗るのだ、と直覺される。

テントのしつらへてある所へ來ると、早や聯隊長佐藤大佐の顔も見え、準備完了といつた空氣が直觀される。一同が刺を通じて挨拶を終へると、聯隊長はちよつと腕時計を見て、嚴格の中にも優しく、

「今、一時十五分。約束の時間を過ぎること、正に十五分わたし共は、一時前から、準備を了へて、待つてゐた。半

まで待つて、見えなかつたら、引き上げようかと、話しあつてゐたところ——。」

と、きめつけるかの一言。遅參の一行、劈頭正に三十棒を滿喫のかたち。心から恐縮しつつも軍規の嚴格を全更に心強く思つた。

聯隊長は自らチョークをとつて、搭乗の順番を掲示板に書かれる。八人の者が二臺の飛行機に一人づつ乗せて貰ふのであるから、一機については四回の割である。私はその最後の番であつた。そして操縦者は中隊長としたためられてゐる。では矢つ張り松村大尉に乘せて貰ふのか。大尉は大正五年にわが彦中を卒業された方であつて、操縦技術の卓越せることは斯界に於いて夙に定評がある。私はすつかり安心して了つた。誰しもみな原則として安全を感じてゐるのではあるが、それでも萬一といつた風なことを、心の奥ひそかに感じないでもない。否、忌憚なくいへば、大いにその萬一の不安があつたのであるが、今やそれが雲散霧消して、ただそんな氣儘な心では相濟まぬといふ感じで胸が一杯になつた。

「第一回と第二回の方は、飛行服に着替へて下さい。」といふ下士の言葉に、一同何とはなしに緊張を覺える。第一

回のN君やY君は、早くも着替を終つて、眼鏡の附いてゐる飛行帽を冠せて貰つてゐる。これで外形だけは、立派な一等飛行士に仕上る。N君の如きは魁偉な身体の主主だけあつて馬賊討伐にでも行つたら、天晴れ偉勳を立てさうな、凜然たる堂々の姿である。

一同偵察機のところに行つて、聯隊長から具さに同乗についての実地説明をきく。飛行中に自己の不用意から跳ね出されたり、或は足を躍らして操縦の妨げとなるやうなことをしたり等のことのないやうにと懇切周到なる注意。やや固くなつて聴く。

かくて、最初に乗る者のみを殘して、われ等はテントの所にひきかへしたのであるが、第一機も第二機も、早や悠々と夏空を飛翔して、われ等を睥睨してゐるものの如くである。

やがて第一機が著陸するとN君は機から跳び下りて、小走りにわれ等のところに歸つてきた。

「何ともないよ。」

これが第一聲であつた。如何にも何ともなかつたやうである。そして、面白かつた有様を、恰も凱旋將軍のやうに物語るのであつた。無事にそして尊い體驗を得たといふ、包みきれない歡喜に輝いてゐる。

N君の飛行服は第三回のA君に渡される。私は尙も空しく待つばかり。淡く心待ちの身のつらさを覺える。——

愈々私の番がきた。手早く上衣を脱ぎ棄てて、飛行服に身を固める。飛行帽を冠せて貰ひ、いかめしい眼鏡をかけると半ば飛行士になつたやうな氣がする。

「飛行機のところまで待つて下さい。」といはれるがままに、聯隊長に挨拶をして、戦闘機が並列してゐるところに行つて、芝生に腰を下ろして待つ。

そのうち偵察機が一機著陸する。

「何うぞ、こちらへ。」

との案内に任せて、機に近づく。操縦者である中隊長に挨拶をして、機に乗る。初めて機上の人となつたのだ。教へられた通りに、腰をかけてバンドをとめる。最うこれで、何時出發して貰つても大丈夫だ。中隊長もやがて乗られる。

聴きなれぬ號令がかかつたと思ふと、機は兵士の手で左に轉回される。

滑走が始まる。轟然たる爆音、突進。暴進、といふ言葉は飛行機の滑走のために、特に作られた言葉であらうか。暴進暴進、暴進。實に痛快。千萬人と雖も我れ行かんの慨を以て機は遮二無二暴進する。あ、最う地面を離れてゐる。何時離れたか判らないが、確かに大地を離れてゐる。だん／＼離れる。だん／＼高くなる。あれ、家も樹も、早やわれ等の下に

なつてゐる。あ、太郎坊を、ぐん／＼登つて行く。登る、登る、登る。三たび急角度をとつて登つて行つた。高度計を見ると、三百五十米の高度だ。太郎坊の頂上は、最うすつと下になつてゐる。

遙か右の方に、琵琶湖の入江が見える。内湖だらうか。と思つてゐる間に、機は左に旋回を始めた。大きく一旋回すると、飛行場が直下に見える。あ、八日市中學校だ。運動場だ。十名餘りの生徒が何かやつてゐるでないか。

左を見、右を見る。機から瞰下す下界の、何と美しいことよ。山や、森や、樹や、草や、さては稻田の緑。地上の世界の、何と鮮かなことよ。ああ善美な浄土よ、樂地よ。人の住む地上も、機上より之を瞰下する時、全く美盡し善盡した浄界さながらに見える。

機は四百五十米から五百米の高度を保つて、彦根に向つて直進してゐる。白布の帯を引いたやうなのは愛知川か。電車線の細いこと。遠くを見れば、琵琶湖の對岸はやや霧にかすれてはゐるが、今津のあたりも認められ、湖南の天津のあたりは却つて明瞭に見える。湖を中心とした縣下一圓の、文字通りの鳥瞰。廣いやうでも狭い。また狭いやうで廣くもある。

機はいとも平安に進行を續ける。下の景色が走つて見えるほどの低さではなく、振動も殆ど感じない。身體がびくつとするやうな激動が一度もないので、飛行機に乗つてゐるとい

丁度彦商の眞上に来たと思ふ時、突如として機は殆ど直角に左に急旋回の離れ業。城の櫓が、手とどくほどに間近く左方斜下に見える。機體は左方へ三、四十度も傾いたであらうか。私の上身も之につれて自然と左に傾いたのを覚える。と直下の濠端の道に、ゐるよ、ゐるよ。白服のわが彦中生が、數多くゐる。みな歩みを止めて、機を見上げてゐるではないか。あ、運動場にも、ゐる、ゐる、澤山ゐる。あれ、手を上げて歡喜してゐる。私も飛行服のポケットにしのばせて置いたハンカチを右手で出して左手に移し、力の限り振り／＼するのであつた。あれ、正面の玄關前の廣場にも、群がつてゐること、群がつて――。

空から見るわが彦中の、如何に懐しいことよ。空から見ると、わが彦中生の、如何に可愛いことよ。私は機上よりわが校を見、わが生徒を見て、覺えず涙ぐましくなるのであつた。と、機は再び玄宮園を左下に見て飛んでゐる。早いこと、早いこと。一瞬の中に、家も樹も、凡てが飛んで行く。高度計を見ると、百米以下だ。思ひ切つての低航。矢つ張り飛行機は早い。視力を超特急に働かせないと、何も見届けられぬ中に飛んで行つて了ふ。

お城を二回旋回して、このたびは湖水の上に出た。再びわが校を左方に見て、機は歸途につくのであつた。

さらば、わが校よ。懐しの彦中よ、さらば。

ふことさへも忘れて、あれよこれよと、新大陸でも発見するかのやうな興味で搜す。また乗つてゐるといふことを考へてみても、早いといふ自覺を促すものが殆どない。ただ顔の上部を切る風が凄まじい勢であるので、そのため早く飛んでゐるのだと感ずるくらゐのものである。

最う彦根が見えさうなものだが。あ、煙を吐いてゐる煙突が目に入つた。鐘紡だ。その右の方にお城がある筈だ、と目で迎ふ。あるよ、あるよ、彦根の城があるよ。ささやかな森となつて、懐しい彦根の城が見える。

彦根の町並が、手にとるやうによく見えた。小學校が先づ目に入る。講堂の大きな屋根が眞先に見えたのである。彦中は何處だ。何せわが校が見えないのか。お城の直ぐ下にある筈。大きな運動場が見えるわけだ。と、二重の屋根が見えた。あれだ、あれだ。あれが懐しいわが彦中の新講堂の屋根だ。他の屋根もみな見える。運動場も見える。わが校の全容が、明瞭りと見える。小學校を左下に見て、機は今やわが彦中の眞上近くを飛んでゐるのだ。誰か出てゐるさうなものと運動場を搜してみるが、誰もゐない。折悪しく授業中なのだらうか。それとも、時間が少し遅れたやうであるから、みな下校した後のだらうか。淋しい。折角わが校を空中訪問したのに、誰もゐないのは淋しい。と感じる暇もなく、機は玄宮園の北方から城を迂回して、彦商の方へ突進してゐる。

さらば、生徒諸子よ。健在なれ、さらば。

感慨無量。何時までも、わが彦中を見守つてゐたいやうな感じがする。離れてゆく身が残り惜しい。

機は三百五十米の高度を保つて、八日市に向つて直進を續ける。之が見納めになるかも知れぬと思つて、縣下の全景をあかす眺めながらも、私はつく／＼感ずるのであつた――。

非常時の今日、皇軍の飛行機に、皇軍の現役將校に、かうして乗せて貰つてゐる私は、何といふ幸福なことであらう。今にもあれ動員令一下せば、機と共に出征して、身を以て皇國を護られる、尊い將校なのだ。その將校の操縦によつて――。私は勿體ないやうに覺える。何とかしてこの大恩を、酬はねばならぬ。何とかして――。

機は早や八日市の上空へ來てゐる。懐しい飛行場が直下に見える。と思ふと、機は大きく旋回を始める。出發の際とは反對の側から下りるのらしい。だん／＼下りる。二百―百―と、ぐん／＼下りる。何ともいへぬ氣持だ。百米以下になつても、なほぐん／＼下りて行く。それに、著陸すべき飛行場はまだ餘程離れてゐるのだ。場に達しない中に下の松林に下りて了ひはせぬかとの氣がする。そつと下をのぞいてみると松林まではまだ可なりあるので、なるほどと心で頷いてゐる中に飛行場へ出た。低く、機は下りて行く。下りる、下りる低く、また低く。今だ、今だと直下の芝生を見つめてゐると

そのまますーつと下りて行く。そつと大地に著いたやうである。機の振動には別段の變異もないので、何時著陸したかは全然判らなかつたが、滑走のためであらうか音の響き具合が微かに變つてきたので、その時地に著いたのであらうと想像された。

機は暫らく心地よく滑走を續けてゐたが、やがて右に轉じて丁度始め出發したその位置に止まる。あれほど速い速力のものが、かうして一米も違はず原位置に来て停止するといふことは、人間業とは思はれない。まことに入神の妙技。

機を下りて、私は再び大地の上に立つた。中隊長に感謝の意を表し、足どりも軽くテントの所に歸つて、聯隊長に心からなる謝意を述べるのであつた。

飛行時間、三十二分。全く夢のやうな感がする。

## 寂しい木屋

五年 齋藤 萬衛

月の光を浴びたあの芝生の廣壯な庭園。その一隅のまばらな月影に清い木屋の花が一杯に擴がつてゐます。

肩を並べて僕ともう一人の人は何も語りもしなければ嘔きもかほしません。

四邊はあくまで清くすみどこにたむろするか虫の一聲は、

す。

木屋の香はあくまで強かつた。

私の頭はあせりにあせりぬいて虚の様です。

明春の戦ひの光景、何といふ人をいぢめるものだらう。

参考書の金文字はほやつと見えてゐます。無造作に投げられた万年筆のペンの尖端が何故か光りません。

數學なんて木屋の香に喰べられてしまへ、消えてしまへ。

「あ、」なんて自分は弱いのだらう。

ためいきの下に、木屋は茶色にヒヤシンスの色を混ぜた様な姿を優しくみせて冷たい水にちつと静止してゐます。

コーヒ茶碗の横腹に何やら金文字がぬつてある。

なんとよむか讀む元氣もないのです。

かうした人生の一斷面を深く考へると、私は徒らにそれがの、しりたくなります。

併し一步停止してあたりを眺めたとき、老いた母親のくぼんだ目、それが一番私にはつらく又ありがたいものです。

そして受験の務、受験生としての務めその響が私の頭を駆けめぐり、心臓を強く打ちたたくのです。

併しそれも瞬間のものに過ぎず又してもひ弱い自己のさびしい姿をじつと見つめなければなりません。

たゞよふ香りはほのかに何かを偲ばせ、何かを暗示させる様です。併し自分はその暗示の心臓をはつきりつかめないので

冷いまでの秋の静寂を物語つてゐます。

私が秋を知つてから幾年目でせう。一つ二つの時の滴りは遠き過去を偲ばせ多感な青年の呼吸に拍車を加へるのです。併し今の秋の斷片こそ私にとつては一番幸福であるかも知れません。

二人の長びいたおほろの影に露がきらりと輝いてゐました。物言はぬ二人の間隙は木屋の香の動きに依て破られました。つ、と白いすきとほる様な手、真白い一折はほつきんと音を投げ、じつと見つめて、永遠に來ないのでせうか此の瞬間を強く記憶の沼に叩き込んで私の手にしつかりと渡してくれました。

私は何故かお月様がうらめしくなつてきて、じつと見返しましたが。月はあくまですきとほつてゐました。

そして月の光が他の人のすつきりした鼻すじに縦の縞を構成したとき私達二人は長い恨みをこめて

さよならしたのでした。

短い晝が過ぎて又しても夜が訪れました。

私は六疊の十六光のまた、きの中に、にぶいニスのはけた机を出して、思ひ出の女神であるかの様に乳色のコーヒ茶碗にかたむけてあるあの木屋をじつと見て深い思ひにとじこめられてしまつたのです。

深い秋の沈黙は私をたまらなく寂しくしました苦しめるので

です。

更け行く秋はなぜ寂しいのでせうか。

此の一挿しの木屋はどうしてこんなに強い香りと刺戟とそれから魅力と興へるのでせう。

やぶれた唐紙にあせた茶色のかまきりが大きく影をうつしてゐます。

そのかまきりが何かの様にびく／＼と動いてゐる。くるりとめぐる黒い目は何を考へてゐるのでせうか。

## 閑語

五年 杉橋 均 五

散つた花とて、又來る年は美しく咲くものである。

彼の、百衣紅を呈し、紫に匂ふエデンの花園の中、既に胡蝶の夢を訪ひ。夕に甘き果の匂ひに酔ふて、アダムとイヴは如何に愉快であつたか。彼等は自己の存在と云ふ特別の意識を發見せずに、春の野に終日歌ふ雲雀のやうに夢の生活をしたもので、即ち、花も、蟲も、雲も、空も……：自己の感覺機關に觸れる總てのものを、皆自己と云ふ中に溶解して、少しも疑問を抱かなかつた爲、彼等には不安と云ふものは少しもなかつたのである。

然るに彼等が蛇に欺され、エホバ神の許されない智惠の實